畿内弥生土器の推移と画期

桑原久男

【要約】畿内地方の弥生土器には中期から後期にかけて大きな変化があるとされている。本稿では、まず、畿内弥生土器を構成する各器種の系列を復原してその変化を概観し、同時に編年の重要な指標とされる篦描沈線文、櫛描文、凹線文について検討をおこなった。そしてこれらの文様が描かれる器種の関係を整理した結果、各器種が櫛描文の有無によって大きく二つのグループ、すなわち櫛描文型器種と非櫛描文型器種に分かれることが明らかになった。さらに、この櫛描文型の諸器種と非櫛描文型の諸器種の展開の状況を、筆者が考える土器編年の中に跡づけることによって土器様式の推移を分析した結果、中期から後期への土器の変化が、より本質的には新旧の器種、つまり櫛描文型の諸器種と非櫛描文型の諸器種が漸進的に交替する過程として捉えられることが明らかになった。この時期、土器の新旧の器種の転換が進行する過程には、畿内の倭人社会が、旧習に代えて次の古墳時代へとつながっていく新しい習俗・祭儀形態を発達させていった姿が反映されているものと考える。

史林七二巻一号　一九八九年一月

はじめに

弥生時代の前期、広く西日本に波及した遠賀川式土器が次第に変容を遂げ、各地域で独自な弥生土器の様式が成立し、発展していったあり様は、弥生文化の定着と発展の跡をそのまま物語るものである。本稿が対象とする畿内地方は、弥生文化の形成の時点においては周辺的な地域であったが、次の古墳時代においては転じて前方後円墳に象徴される強大な権力の栄える中心的な地域となる。前期から後期にいたる畿内地方の弥生土器の推移の中には、このような状況を生みだした社会や習俗の変化が自ずから反映されているであろう。

畿内地方の弥生土器は、小林行雄氏が第Ⅰ様式から第Ⅴ様式まで五つの様式に編年をおこない[1]、第Ⅰ様式を前期、第Ⅱ様式から第Ⅳ様式を中期、第Ⅴ様式を後期にあてている[2]。ところが、このうち第Ⅲ様式・第Ⅳ様式から第Ⅴ様式、すなわち中期から後期にかけては都出比呂志氏が説くように非常に大きな変化がみとめられる[3]。つまり第Ⅲ様式・第Ⅳ様式の土器はつくりが非常に丁寧で、器表を飾るさまざまな文様には、細かな地域色が存在している。また煩雑なまでに器種が細かく分化していることも特徴である。これに対して第Ⅴ様式の土器は、つくりが著しく粗雑化するとともに器表を飾る文様もほとんど姿を潜め、地域色が失われて畿内全体が一体化する。また、さまざまな器種が再編成されて高杯や鉢の小型品の比重が増す。

ただし、研究の現状をみると、この変化の大きさについては共通に認識されてはいるけれども、変遷の過程やその具体的な様相ということになると、なお十分に明らかになっているとはいいにくい。

これまで、第Ⅲ様式から第Ⅴ様式の土器は、文様の変化を手がかりに編年がおこなわれ、櫛描文の段階から凹線文の段階をへて無文の段階に至ると理解されてきたが、文様と器種の関係についての十分な考慮がなされていないために、その理解は一面的なものに留まっている。本稿では、この点をかんがみ、文様自体の分析に加えて、文様が描かれる器種についても検討をおこない、その変化をみることによって、文様の変化が器種、器種構成の変化と密接に関連しながら有機的に進行したものであることを示し、第Ⅲ様式・第Ⅳ様式から第Ⅴ様式への土器様式の推移のあり方を構造的に解明することを目的とする。そして、その変化が、背後に社会態勢の変動をともなった大きな土器様式の変革であることを説き、その性格についても若干の考察を加えたいと考える。

なお本稿では、細かな地域性を追求することが目的ではないので、弥生時代においては土器が常に主体的な変化を示すと深沢芳樹氏が説く[4]畿内南部（大和・河内）に地域を絞って検討を進めたいと思う。

① 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』京　都帝国大学文学部考古学研究報告第十六冊、一九四三年。

② 小林行雄「弥生式文化」（『日本文化史大系』第一巻　原始文化、一九三八年）。

③ 都出比呂志「畿内第五様式における土器の変革」（『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集、一九八二年）。

④ 深沢芳樹「弥生時代の近畿」（『岩波講座　日本考古学』第五巻　文化と地域性、一九八六年）。

第一章　土器編年の再検討

周知のように、小林行雄氏の畿内弥生土器の編年的研究の成果が、一つの帰結点として実証的なかたちで最も体系的にまとめられているのは、一九四三年に刊行された奈良県唐古遺跡①の報告書である。②その後、小林氏自身によって、唐古遺跡においては良好な資料の乏しかった第Ⅴ様式の細別の試みが、大阪府西ノ辻遺跡の資料によっておこなわれるなど、③各様式の細別化は進行したが、編年の体系的な枠組みには変更が加えられていない。

しかし、弥生時代の集落遺跡の調査が著しく進展し、良好な資料が蓄積された現在、第Ⅲ様式と第Ⅳ様式の弁別に関する問題や、第Ⅳ様式から第Ⅴ様式への移行の問題、第Ⅴ様式の細別の問題については多数の研究者によって非常に細かな議論が闘わされている状況であって、結局、本稿が最も関心としている第Ⅲ様式から第Ⅴ様式にかけての土器の編年にはなお共通の理解が得られていないところがある。④

そこで、本章では、次章以下での考察に先立って、この第Ⅲ様式から第Ⅴ様式の土器の編年について問題点の整理をおこない、筆者の意見を示しておくこ

表1　第Ⅲ様式～第Ⅴ様式の土器編年

		大和	河内
Ⅲ	古	唐古・鍵ＳＸ101(20)，四分ＳＥ680	喜志溝 5，亀井ＳＫ3144
	新	唐古・鍵ＳＫ105(22)	川　北，亀井ＳＫ3060
Ⅳ		唐古・鍵ＳＤ204・第14層(19) 清水風ＳＤ01，(唐古北砂)	国府土壙 3，加美方形周溝墓
Ⅴ	古	唐古・鍵ＳＫ104上層(20) 四分ＳＥ813	亀井ＳＸ03，(西ノ辻Ｎ・Ｄ) 西ノ辻Ｉ
	中	唐中・鍵 Pit 5(3)，唐古70号 四分ＳＤ666中層	城山３Ｉ区ＳＢ01 長原ＳＢ01，西ノ辻Ｅ
	新	四分ＳＥ760(唐古45号) 四分ＳＥ1470(纒向Ｉ)	国府ＳＤ01上層 北鳥池下層

とにしたい。ただし、新しい出土資料を網羅することはあまりにも困難であって、筆者の力量のおよぶところではないので、ここではそれに代えて、編年の基準資料となっている唐古遺跡の土器と西ノ辻遺跡の土器を中心にすえて、関連するその他の資料と比較しながら検討を進めることにしよう（表1）。

（一）第Ⅲ様式と第Ⅳ様式の弁別

畿内の弥生土器編年の基準資料となった唐古遺跡の土器のうち、第Ⅲ様式と第Ⅳ様式を設定する基準資料となったのは、粗砂が厚く堆積した北方砂層と呼称された自然流路から出土した土器である。報告書では、第Ⅳ様式には八二号竪穴など竪穴からまとまって出土した資料が存在したが、第Ⅲ様式に限って竪穴からまとまって出土した資料にかけていて、北方砂層において第Ⅳ様式と混在する状態で認められたことが記述されている。小林行雄氏は両者の分離が不分明であると断わりながらも、そのうち櫛描文を持つものを第Ⅲ様式、凹線文を持つものを第Ⅳ様式として分類をおこなっている。[5]

その後、佐原眞氏は、この分類を受けて小林行雄氏が櫛描文を描くことから第Ⅲ様式として分類をおこなった北方砂層出土土器のうち、ひとつの土器のなかで櫛描文と凹線文とを兼ね備えているものを第Ⅲ様式新段階として捉え、櫛描文のみを描き凹線文を含まない第Ⅲ様式古段階と凹線文が発達して櫛描文を駆逐する第Ⅳ様式との間において理解する変遷観を示している。[6]

ところが、一九七〇年代以降、河内地方などで大規模な集落遺跡の調査が進展するにつれて、小林氏や佐原氏が第Ⅳ様式として捉えた発達した凹線文をもつ土器のみで様式を構成する段階が、少なくとも畿内南部では存在せず、凹線文が発達する段階にもなお櫛描文が引き続いて描かれている事実が明らかになり、櫛描文の土器を第Ⅲ様式、凹線文の土器を第Ⅳ様式として分離する上述の編年観と現実の資料のあり方との齟齬が問題とされるようになった。[7] たとえば大和地方では、唐古・鍵遺跡第一九次調査溝ＳＤ204の第一四層、[8] 同第二二次調査井戸ＳＫ101上層、[9] 清水風遺跡河道ＳＤ01、[10] 四分遺

跡溝ＳＤ630[11]出土の土器群が、また河内地方においても枚挙にはいとまがないが、国府遺跡土坑ＳＫ03[12]、加美遺跡Ｙ－1号方形周溝墓[13]、巨摩廃寺遺跡土坑九[14]の土器群などが典型的にこの状況を示している例であろう。

井藤暁子氏は、第Ⅲ様式から第Ⅳ様式への土器の推移を説明するにあたり、櫛描文と凹線文が編年的に明確に分離できないというこのような状況を踏まえ、第Ⅲ様式と第Ⅳ様式を第Ⅲ・Ⅳ様式としてまとめ、土器様式の中で櫛描文に対して凹線文のしめる割合が増してゆく過程を考慮しながら、改めて編年の細分をおこなう方法をとっている。[15]井藤氏が示す第Ⅲ・Ⅳ様式の細別編年は次のとおりである。

第一段階　凹線文出現前。水差しの出現。高杯などの円盤充塡法の登場。叩き目手法の確実な存在。

第二段階　櫛描文の盛用。凹線文の出現。

第三段階　凹線文の盛用。器台の確実な出現。叩き目手法、体部外面下半の篦削りの流行。

第四段階　無文化傾向が強い。ただし、櫛描文、凹線文も残存。西ノ辻Ｎ式の段階。

この井藤氏の編年観によるならば、さきに列挙した凹線文の発達する土器群はすべて第三段階に属していると考えられ、改めて唐古遺跡の北方砂層出土の土器群をみると、若干あるいは新しくあるいは古い特徴を持つものを含みながらも、基本的にはこれらの第三段階の様相を示す土器群と近い内容を持っていることが看取されるのである。近年再び調査が進められている同遺跡では、この凹線文の発達する時期に、北方砂層と同様の粗砂層が遺跡の広範囲にわたって形成されていることが確認され、遺跡全体が激しい洪水の被害にあったことが予想されている。[16]そして、北方砂層を含めて、これらの粗砂層に含まれる土器群が、磨滅の少ない大きな破片から成り、かついずれも凹線文が発達する一方でなお櫛描文が盛行している井藤氏の第三段階の状況を示していることは、北方砂層についても、それが長時間をかけて形成されたというよりは、洪水などの原因によって短期間に形成されたものであることを傍証するものであろう。[17]

したがって、報告書において分離が不分明としながらも第Ⅲ様式と第Ⅳ様式に分離して記述された北方砂層の土器群は、

若干新古のものを混入しはするものの、むしろ基本的には一つの様相にまとめて捉えるべきものと考えるのである。つまり、唐古遺跡の第Ⅲ様式と第Ⅳ様式の編年の問題点は、小林氏自身が言うように両者の分離が不分明というよりは、本来の第Ⅲ様式、井藤氏の第一段階・第二段階の資料が偶然欠如していたために、もともとは櫛描文の土器と凹線文の土器が組み合って基本的に一つの様相をなしていた北方砂層の資料から、櫛描文の土器と凹線文の土器をそれぞれ第Ⅲ様式、第Ⅳ様式として無理に分離をおこなってしまった点にあるのであって、その結果、この時期の土器様式の姿が歪められて理解されてしまうことになったのであろう。

唐古・鍵遺跡では、最近になり、従来欠如していた井藤氏の言う第一段階、第二段階の良好な資料がようやく得られている。第一段階の資料は同遺跡第二〇次調査で大型井戸 S X101 から出土した土器群[18]、第二段階の資料は第二二次調査の井戸 S K105 の上層から出土した土器群[19]である。両者はともに北方砂層の土器よりも型式学的に先行する内容を持っている。他遺跡に目を転じるならば、第一段階の様相を示す資料としては、大和地方では四分遺跡井戸 S E680[20]、河内地方では喜志遺跡溝五[21]、亀井遺跡土坑 S K3144[22]などがあり、第二段階の様相を示す資料としては、大和地方では、四分遺跡井戸 S E1480[23]、河内地方では川北遺跡中期土器群[24]、亀井遺跡土坑 S K3060[25]など多数の資料がある。

これらの土器群を比較すると、井藤氏も言うように、第一段階と第二段階とでは、凹線文の有無、各器種の形態上の変化を除けば、製作技術、器種構成の点で決定的な違いが認められないのに対して、第三段階になると、形態上の変化に加え、内面篦削り技法が採用され、器台や短頸壺が出現するなど製作技術、器種構成の点で非常に大きな変化がみられる。そこで本稿では、井藤氏の第Ⅲ・Ⅳ様式の第一段階を第Ⅲ様式古段階、第二段階を第Ⅲ様式新段階[26]、第三段階を第Ⅳ様式として位置づけることにする[27]。なお、井藤氏が西ノ辻N式に対応させる第四段階については、また幾つかの問題を含むので節を改めて検討をおこなうことにしたい。

（二）第Ⅳ様式から第Ⅴ様式への移行

従来、唐古遺跡の編年を補うかたちで第Ⅳ様式から第Ⅴ様式への移行期の状況を示す基準資料となっていたのは、大阪府西ノ辻遺跡の一九四一年から一九四二年にかけての調査で、N地点の上層とI地点[29]から地点を異にして出土した土器群である。調査者の小林行雄氏は、西ノ辻N地点の土器すなわち西ノ辻N式は第Ⅳ様式末の様相を示すもの、西ノ辻I地点の土器すなわち西ノ辻I式は第Ⅴ様式初頭の様相を示すものと位置づけをおこない、以後これが常識化した理解の仕方になっていた[30]。

ところが近年、河内平野や奈良盆地では、これまでよくわかっていなかった第Ⅳ様式から第Ⅴ様式への移行期の様相を示す良好な土器群がようやく蓄積され、資料の評価が改めて問題とされるようになっている。つまり、これまでどおり西ノ辻N式を第Ⅳ様式末とみる井藤暁子氏の意見[31]、従来どおり西ノ辻N式を第Ⅳ様式末、西ノ辻I式を第Ⅴ様式の初頭として理解しながらも両者が同時並存していた可能性があるとする森岡秀人氏の意見[32]、また西ノ辻N式が第Ⅳ様式の土器ではなく、むしろ第Ⅴ様式初頭の土器として捉えるべきであるという寺沢薫氏[33]、芋本隆裕氏[34]の意見などが対立し、現在では、西ノ辻N式とI式に関する捉え方が研究者によって異なっているのである。

そこでここでは、関連する新しい資料の中で、特にまとまりのみられる大阪府亀井遺跡の土器集積遺構SX03のI・Ⅱ層から出土した土器群[35]と奈良県唐古・鍵遺跡の第二〇次調査で井戸SK104の最上層から出土した土器群[36]を例にとり、若干の検討をおこなうことにしよう。なお、両者はいずれも出土時の知見から短期間に廃棄された埋没した一括性の高い土器群であると推定され、かつほぼ共通する内容を持っている。

両者の土器群を構成する器種には、広口壺、長頸壺、短頸壺、（台付）無頸壺、台付鉢B、高杯A、器台、甕があり、いずれもほとんど文様をもたない。これらの器種のうち、第I様式から第Ⅴ様式を通じてみられる広口壺や甕をはじめ、第

Ⅳ様式に現われて第Ⅴ様式に盛行する短頸壺や器台、出現はさかのぼるが第Ⅳ様式から第Ⅴ様式にかけて著しい発達をみせる高杯などは、第Ⅳ様式と第Ⅴ様式の双方に認められる器種である。一方、(台付)無頸壺や台付鉢Bは第Ⅲ様式から第Ⅳ様式に盛行するが第Ⅴ様式には続かないとされていた器種であり、逆に、長頸壺、小型鉢は第Ⅴ様式に著しく発達するが第Ⅳ様式には存在していなかった器種である。また、第Ⅳ様式に発達していた水差形土器、壺F、高杯Aの存在は認められない。つまり、器種構成に関しては、両者の土器群は第Ⅳ様式と第Ⅴ様式の中間のあり方を示していると考えられるのである。

しかし、器種構成だけからでは、この状況が単に第Ⅳ様式と第Ⅴ様式の混在を示している可能性も捨てきれない。そこで、各器種の個々を改めて見直すと、たとえば、広口壺や甕などにみる肥厚して面をなす口縁部が、大きく拡張されて文様帯となっていた第Ⅳ様式のそれと、ほとんど面をなさず丸くおさまるかたちになる典型的な第Ⅴ様式のそれとの間において型式学的な変化を説明できるように、いずれも第Ⅳ様式や第Ⅴ様式通有のものとは形態上の変化がある。したがって、これを混在とみなして、あるものは第Ⅳ様式、あるものは第Ⅴ様式として分離して理解するのは間違いであり、器種構成の上にあらわれた両者が組み合って存在するという状況は一つの様相として評価をおこなうべきものということになる。これらの土器群の様相は、各器種とも無文化が進行していること、叩き技法はまだ顕著でないが内面に粘土の継目をそのまま残すなど土器のつくりが粗雑になり、おそらくは土器の製作に回転台を用いなくなっているらしいこと、第Ⅴ様式を特徴づける長頸壺、小型鉢や各種の記号が出現していることを考慮すると、寺沢薫氏らの説くように第Ⅴ様式の最初頭に位置づけて考えるのが最もふさわしいであろう。

このような目で改めて河内平野や奈良盆地を眺めると、これと同じ様相を示す土器群が点々と存在し、豊岡卓史氏が指摘するように[37]、亀井遺跡や唐古・鍵遺跡では普遍的に認められることがわかる。さらに視野を広げるならば、摂津地方では芝谷遺跡第一二号住居址出土土器[38]、山城地方では中臣遺跡住居址四出土土器[39]、紀伊北部では滝ヶ峯遺跡Ⅰ-65地点出土

土器[40]など、各地域でこの二つの土器群と類似する様相をもつ資料が存在し、この段階には畿内一円で土器がほぼ共通する様相を示すようになり、畿内内部における細かな地域色が失われていることが知られるのである。

本稿では、第Ⅴ様式初頭を示すこの土器の様相を、亀井遺跡のⅨ-03の土器の報告者、宮崎泰史氏の呼称にならって、[41]かりに「亀井式」と呼んでおくことにしたい。

それでは、この亀井式と西ノ辻Ⅳ式・Ⅰ式とはどのような関係があるのだろうか。順序は逆になるがまず西ノ辻Ⅰ式の方から検討することにしよう。

西ノ辻Ⅰ式を構成する器種には広口壺、長頸壺、短頸壺、台付無頸壺、高杯A、小型鉢、甕があり、これらはいずれも亀井式にみられた器種である。[42]また、少数の器種の口縁端部などに数条の凹線文や浮文を見るほかは、ほとんど文様を持たないことも亀井式と同様であり、さらに各器種とも内面あるいは外面に成形時の粘土紐の接合痕を残している点、第Ⅴ様式の甕に通有の叩き目があまり発達していない点も両者の共通点としてあげられるであろう。亀井式と西ノ辻Ⅰ式の相異点は、器形の細部の形態の差異だけである。この形態的差異の中でも、とりわけ変化が大きいのは長頸壺と高杯である。亀井式の高杯が口縁部が短く直立したものであるのに対して、西ノ辻Ⅰ式のそれは口縁部がやや長く延びて外反度の強まったものである。広口壺については、口縁端部の装飾の状況を別にすれば、亀井式に比べると西ノ辻Ⅰ式の方が、頸部と体部の境界が明瞭化していることが指摘できる。

これらの特徴は、いずれも亀井式の方がより第Ⅳ様式に近い特徴を持ち、西ノ辻Ⅰ式の方が第Ⅴ様式でも後に発達する特徴をもちはじめていることを示すと考えられ、両者が若干の編年的な先後関係にあることがわかる。

しかし、亀井式と西ノ辻Ⅰ式は、このような器種ごとの型式学的な差異が認められるとはいえ、器種構成や製作技術に大きな違いがなくほぼ共通する特徴をもつ以上、若干の新古の差を持ちながらも、大局的には、ほぼ同一の様式内容を持っていると理解するべきであろう。

それでは一方の西ノ辻N式についてはどうであろうか。西ノ辻N地点の土器に含まれる器種には、広口壺、高杯A、鉢B、小形台付鉢、甕があり、広口壺の口縁部端面に円形浮文を持つほかはやはり全く文様がない。従来この土器が第Ⅳ様式末に位置づけられていたのは、土器が全く文様を持たないけれども、第Ⅳ様式を特徴づける鉢Bが存在し、広口壺や高杯A、甕の形態や製作技術が第Ⅳ様式よりも古い特徴を持っていると考えられたからである。しかし、さきに検討した第Ⅴ様式初頭の亀井式の段階にもなお鉢Bは残存しているのであって、第Ⅳ様式の鉢Bが櫛描文や凹線文で装飾し、口縁端部が粘土帯によって段状口縁をなすことに特徴があったことを顧みるならば、N地点の鉢Bは、むしろ無文化が進行し、口縁端部の退化が著しい亀井式のそれに対応させることができるのである。また、甕の口縁端部にしても、広く拡張されて文様帯となっていた第Ⅳ様式のそれと比べると退化の著しい亀井式のものに近いことが指摘できよう。[43] したがって、この西ノ辻N地点の土器群は、第Ⅳ様式の末というよりは、むしろ亀井式、すなわち第Ⅴ様式初頭に対応する様相を示していると捉えられるのである。

しかし、ともあれ、従来この西ノ辻N地点の土器の帰属が定まりきらなかった原因は、公表された資料数が一一点と非常に少なく、器種構成のあり方が一般に誤解を招いていた点にあるのであって、新しい資料が充実してきた現在では、混乱を避けるためにも西ノ辻N地点の土器は基準資料として用いない方がよいと思う。

本稿では、以上の検討の結果を踏まえて、亀井式（西ノ辻N式）と西ノ辻I式を合わせて第Ⅴ様式の古段階として捉え、その中で両者を新古の関係として考えることにする。

（三）第Ⅴ様式の細別

第Ⅴ様式は、一九三五年に小林行雄・藤沢一夫の両氏によって穂積式として捉えられ、[44] 前様式まで伴っていた石器類が姿を消すという事実についても既に認識されていた。[45] 唐古遺跡の調査では、それまでの予想どおり、第Ⅴ様式が編年的に

櫛描文土器と土師器の間に位置することが明らかになったが、資料の不足から第Ⅴ様式自体の細別はおこなわれず、四五号竪穴の上層から出土した土器が第Ⅴ様式の亜式として捉えられるだけに留まった。[46]

その後、坪井清足氏は、唐古遺跡と西ノ辻遺跡の土器を軸に、西ノ辻Ⅰ式→西ノ辻Ⅱ式→西ノ辻Ⅲ式→唐古四五号竪穴上層式という第Ⅴ様式の変遷観を明らかにし、[47]都出比呂志氏は、これを受けて、叩き技法の発達によって甕や壺の形態が徐々に球形化してゆく過程を手がかりにして、河内地方の第Ⅴ様式が、叩き技法の顕著でない西ノ辻Ⅰ式（古相）、叩き技法が明確化した西ノ辻Ⅱ（Ⅲ）式・上六万寺式（中相）をへて、叩き技法の全面開花によって甕の球形化が進行した北鳥池下層式（新相）に細分できることを明快に示している。[48]以後、第Ⅴ様式の細別に関しては、各地域では研究が深められ細かな議論が展開されてはいるが、[49]いずれも基本的には叩き技法の発達の点から土器の形態変化を説明した都出比呂志氏の説をうけている。

本稿においても基本的には都出比呂志氏の編年観にしたがい、第Ⅴ様式を古・中・新の三段階に区分して理解するが、都出氏の編年観とは細部において違いがあり、都出氏が西ノ辻Ⅱ式と同じ中段階に位置づける西ノ辻Ⅲ式を藤田三郎氏の教示にしたがって古段階の資料として捉えなおしている。[50]都出氏は西ノ辻Ⅲ式の短頸壺、器台、特殊な高杯が第Ⅴ様式の中でも新しい特徴をもつとするが、叩き技法の痕跡を残さない甕、口縁部が短く直立する高杯A、頸部の長大な長頸壺などはまさしく前述の亀井式の特徴であって、特殊な高杯も亀井式の段階に類例を見ることができるのである。[51]

古段階については前節で既に記した通りであるので、中段階についてみると、大和地方では唐古・鍵遺跡第三次調査井戸Pit5、[52]四分遺跡溝SD666中層の土器群、[53]河内地方では城山遺跡火災住居址3-Ⅰ区住居址SB01の土器群[54]が代表例としてあげられる。新段階の資料としては、大和地方では四分遺跡溝SD666上層、[55]唐古遺跡第四五号竪穴、[56]四分遺跡井戸SE760、[57]河内地方では国府遺跡溝SD01上層、[58]北鳥池遺跡下層[59]の土器群をあげることができる。

これらの古段階から新段階の土器群を通観すると、壺や甕が叩き技法の発達によって球形化を進めてゆく過程に加えて、

各器種が全体として一律に小型化・粗雑化を進めてゆく過程、広口壺の口縁端部が面を失ってゆく過程、長頸壺の頸部が徐々に縮小してゆく過程、高杯Aの口縁端部が外反度を強めてゆく過程など、さまざまな要素が自然な推移を示していることは上に述べた土器群の変遷が妥当なものであることを証明するものであろう。

① 遺跡の広がりが確認され、現在は唐古・鍵遺跡と名称が改められているので、これに従うが、学史的な意味に用いる場合に限って「唐古遺跡」を使用する。田原本町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所『昭和五二年唐古・鍵遺跡発掘調査概報』、一九七八年。

② 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第一六冊、一九四三年。

③ 小林行雄「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡I地点の土器」(小林行雄・杉原荘介編『弥生式土器集成』資料編一、一九五八年)。

④ 研究の現状については次の文献を参照。井藤暁子「近畿」(佐原眞編『弥生土器I』、一九八三年)。

⑤ 前掲注②文献。

⑥ 佐原眞「畿内地方」(小林行雄・杉原荘介編『弥生式土器集成』本編二、一九六八年)。

⑦ 曽我恭子「弥生式土器(中期)」(『瓜生堂遺跡』資料編、一九七二年)。

⑧ 田原本町教育委員会「唐古・鍵遺跡第一六・一八・一九次発掘調査概報」(『田原本町埋蔵文化財調査概要』二、一九八二年)。

⑨ 田原本町教育委員会「唐古・鍵遺跡第二二・二四・二五次発掘調査概報」(『田原本町埋蔵文化財調査概要』四、一九八六年)。

⑩ 奈良県立橿原考古学研究所「天理市清水風遺跡」(『一九八六年奈良県遺跡発掘調査概報』、一九八七年)。

⑪ 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ』奈良国立文化財研究所学報第三七冊、一九八〇年。

⑫ 山本雅靖「河内国府遺跡出土の弥生式土器――一土坑出土の弥生式土器群の紹介とその製作技術について――」(『大阪文化誌』第三号、一九八二年)

⑬ 永島暉臣慎・田中清美「大阪市加美遺跡の弥生時代中期墳丘墓」(『月刊文化財』、一九八五年)。

⑭ 大阪府教育委員会・大阪文化財センター『巨摩・瓜生堂』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書、一九八一年。

⑮ 井藤暁子「畿内の櫛描紋土器」(金関恕・佐原眞編『弥生文化の研究』第4巻 弥生土器Ⅱ、一九八七年)。

⑯ 前掲注⑧文献。

⑰ 先に掲げた近在の清水風遺跡自然河道SD01も同様の砂層堆積を示している。清水風遺跡は唐古・鍵遺跡の北西六〇〇mに位置する遺跡で、この自然河道SD01はちょうど北方砂層の延長上にあたり、流れの方向も一致することから、両者が同一のものである可能性が高い。

⑱ 田原本町教育委員会「唐古・鍵遺跡第二〇次発掘調査概報」(『田原本町埋蔵文化財調査概報』三、一九八六年)。

⑲ 前掲注⑨文献。

⑳ 前掲注⑪文献。

㉑ 大阪府教育委員会『喜志遺跡・東阪田遺跡発掘調査概要・Ⅵ―宮田林市喜志・羽曳野市東阪田所在―』、一九八三年。

㉒ 大阪文化財センター『亀井』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書、一九八三年。

㉓ 前掲注⑪文献。

㉔ 大阪府教育委員会『川北遺跡発掘調査概要』、一九八一年。

㉕ 前掲注㉒文献。

㉖ 佐原眞氏の言う第Ⅳ様式新段階は、第Ⅳ様式と筆者が考える資料が主体であって、内容が大きく異なることに注意。たとえば佐原氏は、国府遺跡土坑SK03の資料を第Ⅲ様式新段階に位置づけている。佐原眞編『弥生土器Ⅰ』、一九八〇年。

㉗ 寺沢薫氏は、凹線文出現以降を第Ⅳ様式とするが具体的な編年案は提示していない（「大和弥生社会の評価をめぐって―石野氏の批判に対して―」『古代学研究』九五号、一九八一年）。また藤田三郎氏もかつて凹線文以降を第Ⅳ様式とみる説に賛同しているが、現在は意見を改められている由である（「銅鐸鋳造年代について」『古代学研究』第一〇〇号、一九八三年）。一方、溝口孝司氏は、いくつかの器種について、文様と細部形態の相関を分析することによって第Ⅱ様式～第Ⅳ様式の推移を説明するが、器種構成の変化によって様式の界線をひく視点は筆者と同様であり、また筆者とほぼ同様の結論に達している（「土器における地域色―弥生時代中期の中部瀬戸内・近畿を素材として―」『古文化談叢』第一七集、一九八七年）。

㉘ 小林行雄「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡N地点の土器」（小林行雄・杉原荘介編『弥生式土器集成』資料編一、一九五八年）。

㉙ 前掲注②文献。

㉚ ただし、佐原眞氏は、西ノ辻N式が様式として存在するのは中河内の山麓や高所に限られていると述べ、第Ⅳ様式末に位置づけながらも幾分特殊なものであるとしている。佐原眞「大和川と淀川」（『古代の日本』第五巻　近畿、一九七〇年）。

㉛ 前掲注⑯文献。

㉜ 森岡秀人「西ノ辻N式並行土器群の動態―畿内第Ⅳ様式の細分作業と関連して―」（『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』、一九八二年）。

㉝ 寺沢前掲注㉗文献。

㉞ 芋本隆裕「畿内第Ⅴ様式土器」（金関恕・佐原真編『弥生文化の研究』第四巻　弥生土器Ⅱ、一九八七年）。

㉟ 大阪文化財センター『亀井遺跡Ⅱ』寝屋川市南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ、一九八四年。

㊱ 前掲注⑱文献。

㊲ 豊岡卓之「畿内第Ⅴ様式暦年代の試み」（『古代学研究』第一〇八号・第一〇九号、一九八五年）。

㊳ 原口正三「芝谷遺跡」（高槻市史編纂委員会『高槻市史』第六巻　考古篇、一九七三年）。

㊴ 京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡発掘調査概報昭和五七年度』、一九八三年。

㊵ 和歌山県教育委員会『滝ケ峯遺跡発掘調査概報』、一九七二年。

㊶ 前掲注㉟文献。

㊷ 西ノ辻Ⅰ地点の土器には亀井式に認められる台付鉢Bと器台が欠けている。しかし、西ノ辻Ⅰ地点の土器は四〇数個という量的に限定された資料であるから、台付鉢Bと器台がみられないことについては検討の余地がある。第Ⅲ様式、第Ⅳ様式に盛行する器種であった台付鉢Bはともかく、第Ⅴ様式と第Ⅴ様式の双方に通有の器台については偶然に欠落していたものとみるのが妥当であろう。

㊸ ただ一点問題となるのは、高杯Aの形態である。亀井式の高杯Aが口縁が屈曲して短く立ち上がる特徴を持つことは先に述べたとおりであるが、この西ノ辻N式のそれは、ゆるやかに湾曲する皿状のものであって、第Ⅲ様式・第Ⅳ様式に広くみられるものと共通しているので

ある。しかし、あえて言うならば、脚端部の拡張が著しくない点などは第Ⅳ様式よりも後出の要素であるとも考えられる。

㊹ 森本六爾・小林行雄「弥生式文化末期の研究」(『考古学』第六巻第三号、一九三五年)。

㊺ 小林行雄「弥生式文化」(『日本文化史体系』第一巻 原始文化、一九三八年)。

㊻ 前掲注②文献。

㊼ 坪井清足「穂積式土器」(『日本考古学辞典』、一九六二年)。

㊽ 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係—淀川水系を中心に—」(『考古学研究』第二〇巻第四号、一九七四年)。

㊾ たとえば、次のような研究があげられる。寺沢薫「大和における第Ⅴ様式土器の細別と二、三の問題」(奈良県立橿原考古学研究所『奈良市六条山遺跡』奈良県文化財調査報告書第三四集、一九八〇年)。森岡秀人「畿内第Ⅴ様式の編年細分と大師山遺跡出土土器の占める位置」(『河内長野大師山』関西大学文学部考古学研究報告第五冊、一九七七年)。豊岡前掲注㉗文献。森田克行「遺物及びその考察—第Ⅴ様式の型式細分について」(高槻市教育委員会『安満遺跡発掘調査報告書—9地区の調査』高槻市文化財調査報告書第一〇冊、一九七七年)。

㊿ 小林行雄「大阪府枚岡市額田町西ノ辻D・E・F・H地点の土器」(小林行雄・杉原荘介編『弥生式土器集成』資料編一、一九五八年)。

(51) 亀井遺跡SX03、唐古・鍵遺跡第一〇次調査SK104に類例がある。

(52) 寺沢薫氏のご好意により実見。田原本町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所『昭和五二年度唐古・鍵遺跡発掘調査概報』、一九七八年。

(53) 前掲注⑪文献。

(54) 大阪府教育委員会・大阪文化財センター『城山(その二)』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書、一九八七年。

(55) 大阪市文化財協会『(改訂)長原遺跡発掘調査報告』、一九八二年。

(56) 前掲注⑪文献。

(57) 前掲注②文献。従来、上層式と下層式に分けて時期が想定されていたが、土器群の埋没過程の検討と四分遺跡井戸SE760出土資料との比較から両者を単一の様相にまとめて捉える豊岡卓之氏の説にしたがう。前掲注㉗文献。

(58) 前掲注⑪文献。

(59) 赤井毅彦「国府遺跡SD01出土の弥生土器」(藤井寺市教育委員会『石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅱ』藤井寺市文化財報告第二集、一九八七年)。

(60) 芋本隆裕「北鳥池遺跡出土土器の再整理」(『東大阪市遺跡保護調査会年報、一九八〇年』)。

第二章　文様の変化と器種の変遷

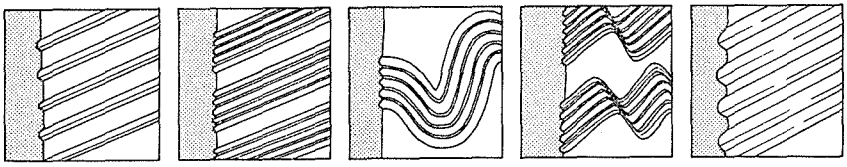
畿内弥生土器の編年において、とりわけ重要な指標になっているのは箆描沈線文、櫛描文、凹線文という文様の変化である。一方、畿内弥生土器は、総体としてみた場合、非常に豊かな器種で構成され、器種の個々が漸進的な変化を示して

いる。本章では、第Ⅲ様式から第Ⅴ様式にいたる土器様式の推移を大きく捉えるために、第Ⅰ様式の段階にまでさかのぼって、文様と器種の変化のあり方を相互に関連づけながら跡づけておくことにしたい。

（一）文様の検討（図1）

まず、篦描沈線文(1)は、篦状の工具を用いて沈線を一本ずつ別々に器表に巡らせる文様であって、第Ⅰ様式の土器を特徴づけている。古い段階ほど沈線の条数が少なく、新しくなるにつれて沈線の条数が増すという傾向がみられ、広口壺に最も顕著な推移をみることができる。つまり、当初は頸部と肩部の二ケ所にあたかも口縁部と肩部、肩部と腹部を区画するかのように、それぞれ一～二条の沈線が描かれていたものが、三～五条と次第に沈線の数を増し、最後にはますます沈線の条数が増すとともに、二つの文様帯が一体化してときには一〇数条もの沈線からなる幅の広い帯状の文様帯へと変容することになるのである。①

次に、櫛描文(2～3)は、先端が櫛のように分れた原体を用いて、数条の沈線を一つの操作で描く文様である。新しい段階の篦描沈線文が多数の条線を一本ずつ別々に描いていたのに対して、櫛描文では同じ条数を描くための操作の回数を減らすことが可能である。直線文、波状文、流水文、簾状文、扇形文、列点文などの種類があるが、時期によって違いがあり、第Ⅱ様式では列点文、簾状文の存在は稀である。また、同じ種類の文様でも表現には違いがあり、たとえば時期による変化の最も顕著な波状文では、はじめ手首のひねりによって原体の軸の向きを変えながら山と谷を描くぎこちない表現(3)だったものが、後には原体の向きを一定に保ったまま上下の振幅



1. 篦描沈線文　2. 櫛描直線文　3. 櫛描波状文(Ⅱ)　4. 櫛描波状文(Ⅲ)　5. 凹線文

図1　各種の文様と断面模式図

だけで山と谷を描く表現(4)へと変化する。[3]

一方、凹線文(5)は、一種の沈線文であって、一本ずつ別々に描くという点では篦描沈線文と同様であるが、描出方法はまったく異なり、回転撫でによって器表を沈み込ませて表現したものである。[4]第Ⅳ様式に盛行するが、第Ⅴ様式にも退化して沈線状の表現になったものが一部のこる。[5]

このようにみるならば、土器編年の指標的な文様のうち、篦描沈線文が多条化して櫛描文が成立し、複雑に発達してゆく過程は、文様自体の型式学的な変化として合理的に理解することができ、またこれとは別に、凹線文が退化して文様としての性格を失ってゆく過程も同じく自然な変化として捉えることができるであろう。ところが、これに対して櫛描文と凹線文については、文様の性格、由来がまったく異なっていて、文様自体の型式学的に連続する変化としては理解することができないのである。

しかし、視点を変えて眺めると、そのうち発達した櫛描文と凹線文に関しては、少なくとも一つ重要な共通点を認めることが可能である。すなわち発達した櫛描文と凹線文は、ともに土器をある程度の一定した速さで回転させることによって始めて描出が可能になるということである。

佐原眞氏は、畿内地方の弥生土器の櫛描文が回転台を用いて土器を回転させながら描くものであると考え、これに畿内型櫛描文の名を与えている。[6]佐原氏のいう回転台は、文字どおり土器を回転させる台であるが、轆轤とは異なり、水挽きによって土器を成形するものではなく、粘土紐の積み上げによって成形を行なってから、器表の調整や文様の施文を容易にするためのものである。したがって、轆轤に求められるような高速回転は必ずしも必要ではない。しかし、第Ⅲ様式にみる波状文の表現(4)などは、回転台上の土器の回転が速さには欠けるにしても安定したものであったことを示してくれているのである。[7]これに対して、佐原氏が回転台の使用が始まったと考える第Ⅰ様式新段階の多条化した篦描沈線文は土器をなんらかの方法で回転させていることは認められるにしても、その回転は極めてゆるやかなものであったとみられる。

また第Ⅱ様式の櫛描文にしても、波状文の表現に明らかなように、土器の回転のスピードは比較的ゆるやかなものであったと推定される。つまり、第Ⅱ様式から第Ⅲ様式・第Ⅳ様式にかけての櫛描文の種類や表現にみる変化、すなわち列点文や簾状文が発達し、波状文の描き方が巧みになるという変化は、土器の回転技術が不安定なものからより安定したものへと変化したことを示していると考えられるのである。[18]

この土器を安定した速さで回転させる技術の発達は、櫛描文だけに限らず土器製作の過程のさまざまな面に影響を与えている。その中でもとりわけ影響が顕著なのは、最終的な仕上げの段階に、器表を指あるいは布や皮などを用いて横方向になで上げる回転撫で技法の発達である。[19]凹線文は、そもそもこの回転撫で技法を駆使して描く器表調整を兼ねる性格の文様であって、第Ⅳ様式における凹線文の発達は、この段階には土器の回転技術が高度に発達していたことを示しているといえるであろう。また、第Ⅱ様式に大和地方でみられる甕の口縁部が刷毛目をそのまま残し、端部を押さえて整えるだけであるのに対して、第Ⅳ様式を代表する甕の口縁部が端部を大きく拡張して数条の凹線文を描くものへと変化していることは、回転撫で技法の発達、つまり土器に安定した回転を与える技術の発達がやはり第Ⅲ様式の間にあったことを示している。

発達した櫛描文と凹線文が、このように文様としての系譜に違いがあり、かつともに第Ⅲ様式における安定した回転技術の発達によって技術的に成立し得たものであるとするならば、両者が第Ⅲ様式新段階・第Ⅳ様式と時間的な重なりが大きいことも不自然ではなく、また両者が第Ⅴ様式初頭の亀井式の段階に軌を一にして衰退することも回転技術の衰退を背後において合理的に理解することができるであろう。

（二）櫛描文型器種と非櫛描文型器種

それでは、このような関係をもつ篦描沈線文、櫛描文、凹線文は、それぞれどのような器種に描かれているのであろう

か。

弥生土器の器種構成が、深鉢と浅鉢から成る縄文土器とは異なって、基本的には、貯蔵用の壺、煮沸用の甕、供膳用の鉢・高杯で構成されていることは周知のとおりであるが⑩、畿内弥生土器についてみるならば、壺、甕、鉢・高杯という基本的な組合せは一貫してみられるものの、各器種は、文様や形態において次のように細かく区別することが可能である⑪。

まず壺類には、広口壺、壺D、二重口縁壺、直口壺、細頸壺B、水差し形土器、壺F、短頸壺、長頸壺、小形台付壺が認められる。鉢・無頸壺類には、台付無頸壺A、台付無頸壺B、台付無頸壺C、鉢A、鉢B・台付鉢B、鉢C、双把手付台付鉢、小形台付鉢、小形鉢、手あぶり形土器。高杯類には、高杯A、高杯B、高杯Cをあげることができる。また、脚台のみが独立した器種として器台がある。甕類には、甕A、甕B、甕C、甕Dを認めることができる。ほか、壺や甕の蓋も土器でつくられている。

これらの器種と前節で検討した文様との関係についてみると、注目されるのは、文様自体の検討からは系譜につながりのみられなかった櫛描文と凹線文が、描かれる器種という点でも連続性がみられないことである。

以下、具体的な状況をみることにしよう。

まず篦描沈線文を描く器種には、広口壺、無頸壺B、鉢A、鉢B、高杯B、甕Aがあり、櫛描文を単純に描く器種には、広口壺、直口壺、細口壺A、水差形土器、無頸壺B、台付無頸壺C、鉢A、鉢B・台付鉢B、高杯Aを認めることができる。篦描沈線文を描いていた器種のうち、高杯B、甕Aを除く広口壺、無頸壺B、鉢A、鉢Bはそのまま櫛描文を描く器種へと移行している。

一方、凹線文を単純に描く器種には、水差形土器、鉢A、壺D、壺F、短頸壺、台付無頸壺A、高杯A、高杯B、器台、甕Dが存在し、広口壺、鉢B・台付鉢Bにも凹線文を単純に描く例が稀にみられる。ただし、以上の器種における凹線文の施文位置や条数は多様であって、器台のように体部の全面にわたって多数条の凹線文を描いているような器種もあれば、

甕Dのように口縁端部だけに二～三条の凹線文を描いているだけの器種もある。

篦描沈線文、櫛描文、凹線文は、このように同じ一つの土器に他の文様を混えずに単純に描かれる場合のほかに互いに共存していることがある。ただし、篦描沈線文と櫛描文、櫛描文と凹線文の共存例が存在するのに対して、篦描沈線文と凹線文の共存例はない。篦描沈線文と櫛描文が同一個体内において共存する例は、たとえば唐古・鍵遺跡第二二次調査SK201出土の広口壺[12]や四分遺跡SK1440の広口壺[13]などに認められるが、これは非常に稀な例であって、篦描沈線文から櫛描文への変化が自然に連続する変化であったことを考慮するならば、過渡的な性格を持つものと考えて差し支えないと思われる。一方、櫛描文と凹線文が個体内で共存する例は、普遍的に認められ、このようなあり方を示す器種には、広口壺、細口壺A、無頸壺B、鉢B・台付鉢Bが存在し、水差形土器にも例がある。

このようにみると、櫛描文は描く器種、描かない器種が明確に分かれているのに対して、凹線文は、櫛描文の有無に関わらず広範な器種に描かれている状況が看取されるのである。したがって、しばしば第Ⅲ様式・第Ⅳ様式の土器を記述する際に、櫛描文の土器、凹線文の土器という分類がおこなわれることがあるけれども、この分類は本質的なものではない。それよりもむしろ、畿内弥生土器を構成する器種は、櫛描文の有無によって大きく二つのグループに分けて捉えられるのであって、凹線文は、櫛描文を描く器種と櫛描文を描かない器種が組み合う状況の上に、双方の器種を貫いて描かれる技術的性格の強い文様であると捉えられるのである。本稿では、器種にみるこの二つのグループを櫛描文型器種、非櫛描文型器種と呼んで区別することにしたい。

（三）各器種の型式学的変遷（図2～図7）

以下では、畿内弥生土器編年の標式遺跡となった唐古・鍵遺跡の所在する大和地方の資料を中心に、前節で述べた器種の二つのグループについて、特に文様との関わりに留意しながら、各器種の型式学的な変化を示しておくことにしよう。

a　櫛描文型器種

広口壺（図2－1～9）　球形の体部から口頸部が漏斗状に開く壺である。第Ⅰ様式から第Ⅴ様式を通じてみられ、篦描沈線文が多条化して櫛描文が成立し、さらに櫛描文が複雑に発達してゆく過程を最も自然に跡づけることのできる器種である。広口壺A・広口壺Bに細分することが可能であるが、[14]ほぼ同一の変化を示すので、ここでは一括して記述する。第Ⅲ・第Ⅳ様式の広口壺Bには畿内内部においても細かな地域色が存在し、摂津・北河内をはじめとする地域では頸部や口縁端部に突帯文や凹線文を描くものが発達するのにたいして、中・南河内では凹線文の発達がみられない（8・9）。また大和においても凹線文だけを描くものは発達せず、頸部や口縁端部に凹線文をもつ場合でも体部には櫛描文を盛んに描いている。つまり、大和地方では、篦描沈線文→櫛描文→櫛描文＋凹線文という推移をへて、凹線文のみのものをほとんど欠いたまま、そのまま無文への変化がみられ、さらに河内地方の一部では、櫛描文＋凹線文の段階が欠如して、櫛描文の段階からいきなり無文の段階へと推移している状況が看取されるのである。なお、この文様の変化に沿って形態の変化も同時に進行し、たとえば口縁端部をみると、大和地方の場合、篦描沈線文の段階では単に丸くおさまるかたちだったものが、櫛描文の段階では面をなすようになり、櫛描文＋凹線文の段階では上下に大きく拡張されるようになるが、文様を失う段階になると再び面を失ってゆくことがわかる。[15]

直口壺（図3－2～3）　径の大きい筒状の口頸部が倒卵形の体部からまっすぐに立ち上がる壺である。櫛描文をもつ。第Ⅲ様式にみられる。

細口壺A（図3－4～6）　算盤玉形の体部から筒状の口頸部がやや内彎気味に立ち上がる壺である。第Ⅲ様式から第Ⅳ様式にかけてみられるが、第Ⅱ様式にみられる直口の壺（図3－1）も体部の形態からみるとこの細口壺Aの系列に連なるものかもしれない。第Ⅲ様式古段階には小型品がもっぱらで、各種の櫛描文を描いているが、次の段階には大型品が登場し、第Ⅳ様式には頸部下端や口縁部に凹線文を描くようになる。一方、河内地方では凹線文を受けつけず、代わりに簾状

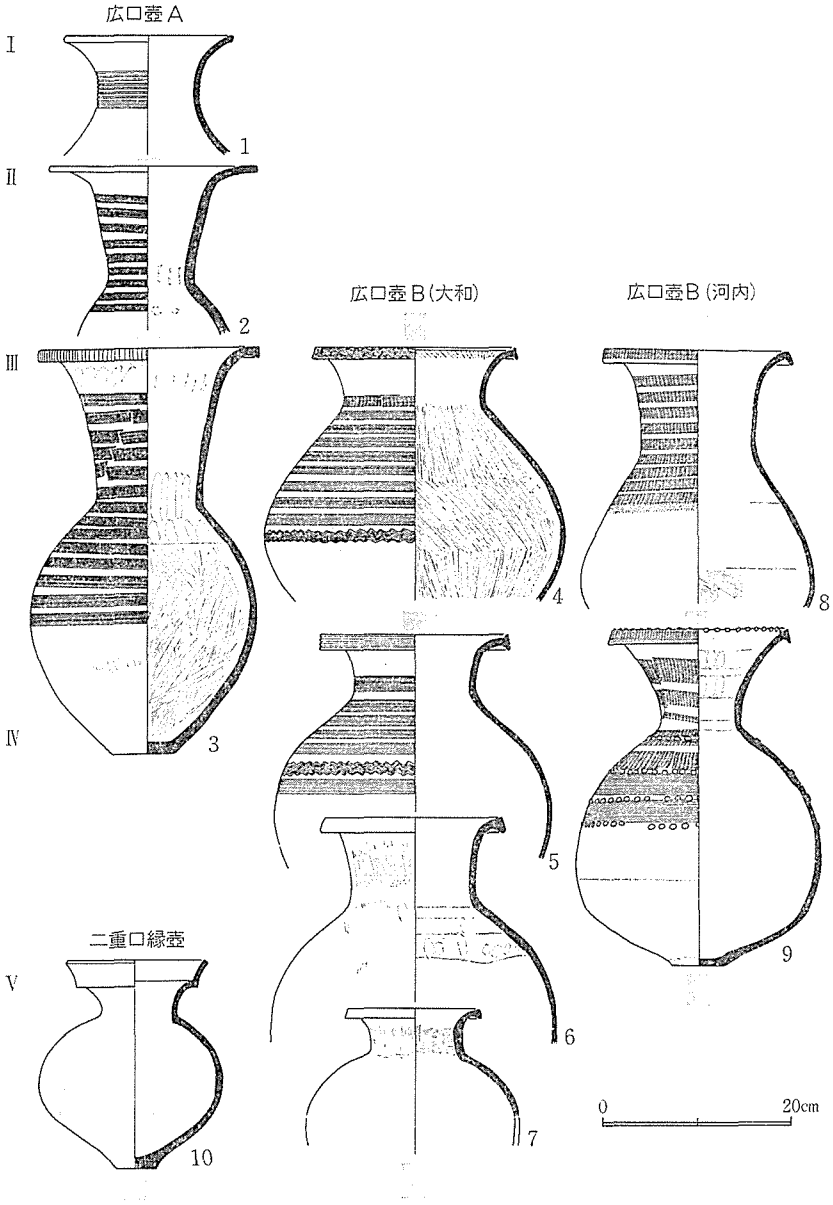


図2　各器種の変化(1)
1～3・5・10唐古・鍵　4・7四分　8亀井　9国府

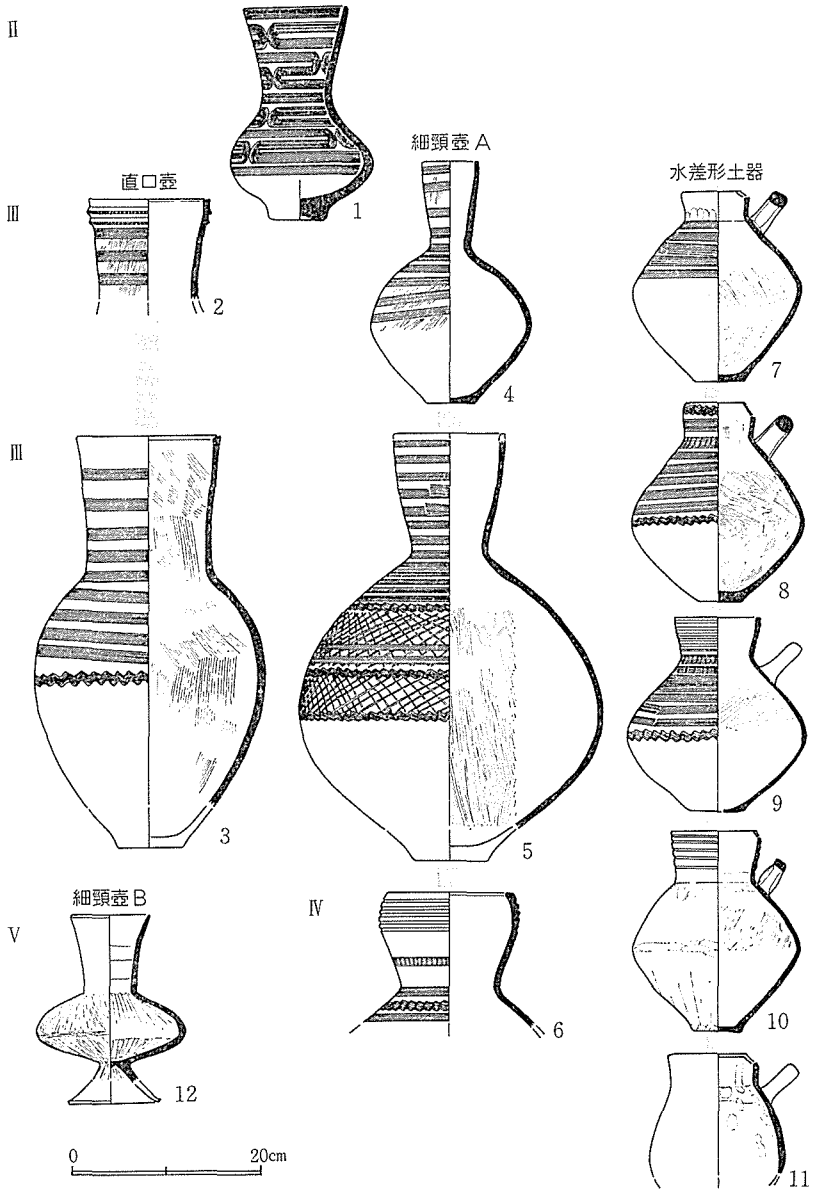


図3　各器種の変化(2)
1～4・6～9・11唐古・鍵　5・12四分　10清水風

文を煩雑なまでに描いているものが認められる。

水差形土器（図3－7～11）　短い筒状の口頸部を持ち、算盤玉状の体部の肩部に横方向の把手がつく壺である。指をかけるため、口縁部の把手側を半円状にくぼめているものが多い。第Ⅲ様式から第Ⅳ様式に盛行する器種である。第Ⅴ様式初頭の亀井式の段階にもみられるが、形態は著しく退化したものとなっている。文様には、櫛描文だけを描くもの、櫛描文と凹線文を兼ね備えるもののほかに、凹線文だけを描くものが第Ⅳ様式に存在する。ただし、櫛描文をもつ8や9と凹線文のみの10との間には調整や形態の点で若干の違いがあり、一系的な変化としては捉えにくい面もあるが。河内地方では、第Ⅳ様式の段階に、凹線文を発達させる型式と同時に、凹線文の代わりに簾状文を発達させる型式が盛行している。

無頸壺B・台付無頸壺B（図4－1～5）　算盤玉形の器体を持つ文字どおりの無頸壺である。口縁端部に二孔一対の紐孔をうがち、脚台がつくこともある。第Ⅰ様式から第Ⅴ様式古段階にかけてみられる器種である。篦描沈線文が櫛描文におき変わり、次第に櫛描文が発達してゆく過程にともなって、口縁端部が同時に型式学的な変化を示している。つまり、口縁端部は、はじめは丸く単純におさまるかたちだったものが、次にはゆるやかに外反するようになり、さらに外反度の進んだ段階をへて、ついには粘土帯を貼付することによって口縁端部を表現するいわゆる段状口縁へと変化するのである。この段状口縁の段階では、口縁端部が文様帯となり、大和地方では凹線文が、河内地方では簾状文が描かれることが多い。次の第Ⅴ様式古段階になると、文様がほとんど失われ、口縁端部もわずかに肥厚させるだけのものへと変化する。

台付無頸壺C　体部に精緻な簾状文を描き、その上に粘土紐帯を縦方向に貼付する精製の器種である。脚台を持つことを常とする。河内地方を中心に盛行する器種であり、従来第Ⅲ様式に位置づけられていたが、現在では、諸遺跡における知見からむしろ第Ⅳ様式から第Ⅴ様式初頭に伴うものと理解が改められている。[16]

鉢A（図4－10～13）　体部がゆるやかに立ち上がり、単純な口縁部をもつ鉢である。第Ⅰ様式から第Ⅳ様式にかけてみられる。第Ⅰ様式から第Ⅲ様式へは篦描沈線文が櫛描文へ自然に移行してゆくが、第Ⅳ様式に盛行するものは櫛描文の代

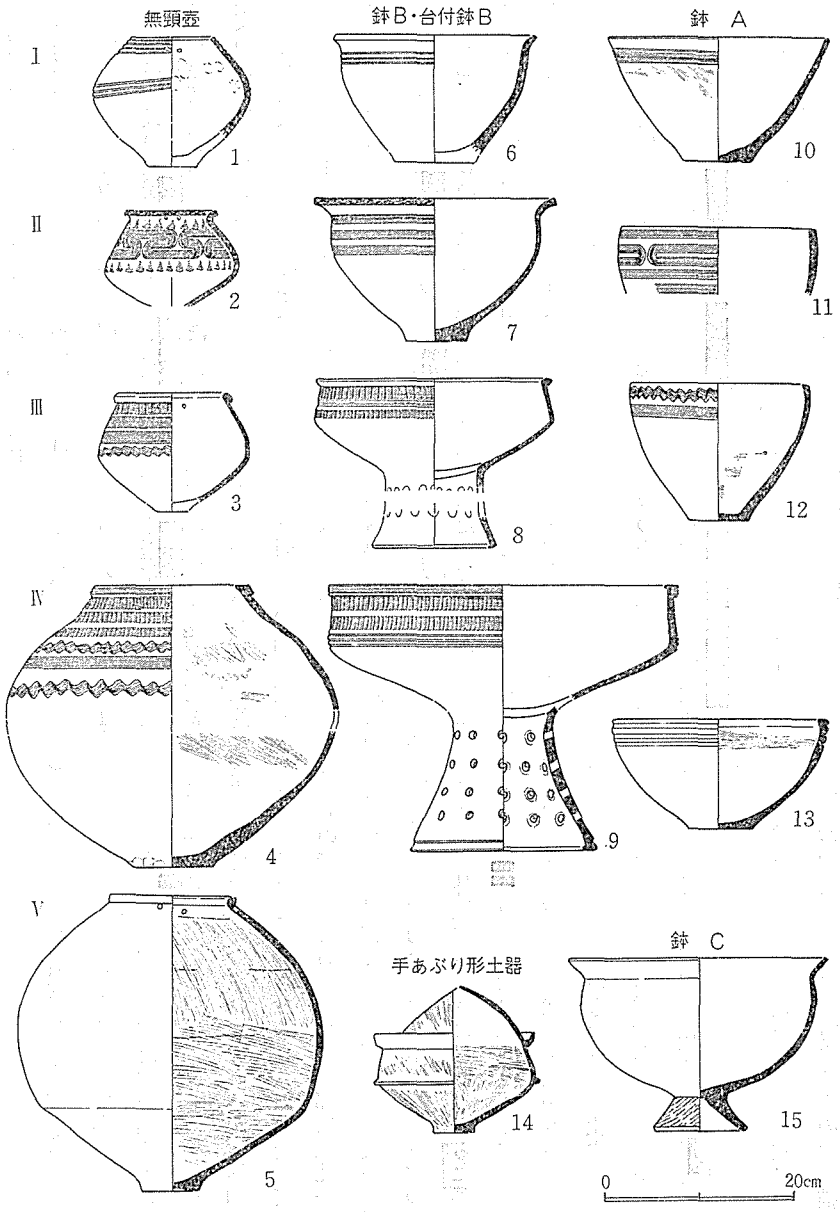


図4 各器種の変化(3)
1・2・4～6・9・11～13唐古・鍵 3・7・8・14・15四分

わりに凹線文だけを描く型式であって、その間の推移は明瞭でない。櫛描文と凹線文を兼ね備えるものはほとんど認められない。

鉢B・台付鉢B（図4－6～9）　口縁端部が外反ないしは外折する鉢である。第Ⅰ様式から第Ⅳ様式にみられ、第Ⅴ様式古段階にも残存するが、その間の形態上の変化には著しいものがある。大和地方では、広口壺や無頸壺Bと同様に、箆描沈線文→櫛描文→櫛描文＋凹線文→（凹線文）→無文という推移が認められるが、中南河内地方では凹線文の発達がみられない。また、この文様の変化に沿うように、形態についても鮮やかな変化があり、たとえば腹部の発達や口縁端部の形態などに無頸壺Bと類似する細かな型式学的な変遷を追うことができる。

b　非櫛描文型器種

壺D（図5－1～4）　形態は広口壺に類似しているが、甕と同様の調整をおこなう。また、器表に煤が付着している場合が多いことも甕と同様の特徴である。稀に横方向の把手がつくものが存在する。第Ⅲ様式から第Ⅳ様式にかけてみられる器種である。[17] 広口壺とは異なって櫛描文を持たず、第Ⅲ様式には外面は刷毛目調整で仕上げられていたが、第Ⅳ様式には叩き目を器表に残すものが多くなる。また、口縁端部ははじめ無文であったものが後には拡張されて数条の凹線文を描くように変化する。この段階には口縁部の内側に一対の紐孔を持つものが多い。

二重口縁壺（図2－10）　通常の広口壺の口縁端部にあたる部分から口縁部がさらに外接して立ち上がる壺である。第Ⅴ様式の新段階に出現し、庄内式、布留式へと続く。文様は持たない。

細口壺B（図3－12）　細口壺Aと同様、算盤玉形をした体部から細い筒状の口径部が立ち上がる壺であるが、細口壺Aとは系列がつながらない。第Ⅴ様式にみられ、文様を持たない。

壺F（図5－7・8）　倒卵形の体部から頸部が外開きに立ち上がり、さらに口縁部が上方に延びる壺である。第Ⅲ様式から第Ⅳ様式にかけてみられる。体部に絵画を描いていることがある。体部は刷毛目調整をおこなうが、口縁部に数条の

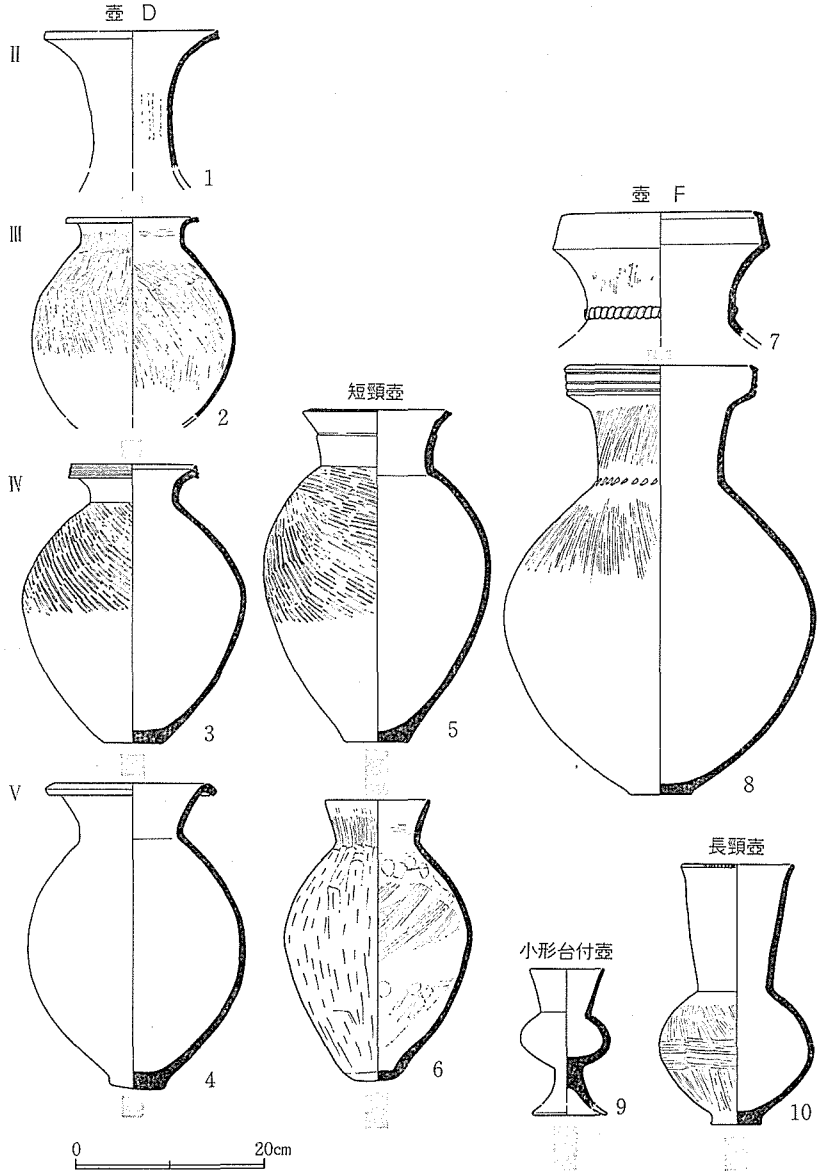


図5　各器種の変化(4)
1～10唐古・鍵

凹線文を描く第Ⅳ様式のものになると、刷毛目の下に叩き目が隠れていることが看取される例が多い。また頸部下端の突帯をみると、はじめは貼付した粘土帯の上を指で押捺していたものが、次には指の代わりに割り板ないしは篦状の工具を用いて刺突をおこなうようになり、最後には、突帯が失われて刺突だけが直接器表をめぐるようになるという鮮やかな型式学的な変化を辿ることができる。この変化は絵画の時期を決定する手がかりになる場合がある。

短頸壺（図5－5・6）　倒卵形の器体から筒状の短い口頸部がまっすぐに立ち上がる壺である。櫛描文は持たない。稀に横方向の把手のついたものが存在する。第Ⅳ様式から第Ⅴ様式に盛行する器種であるが、河内地方では第Ⅳ様式の段階では発達せず、第Ⅴ様式になって普遍的にみられるようになる。第Ⅳ様式には、口縁部に数条の凹線文を描き、頸部下端に壺Fと同様の刺突を巡らせているものが多いが、第Ⅳ様式には双方とも失われる。また第Ⅳ様式には器表に絵画を描く例があり、第Ⅴ様式には記号をもつ例が多い。

長頸壺（図5－10）　球形あるいは算盤玉形の体部から長い筒条の口頸部が立ち上がる無文の壺である。第Ⅴ様式に盛行する。頸部ははじめ長大であったものが、第Ⅴ様式の中で次第に縮小し、外面の磨き調整も省略化の方向に向かう。頸部や体部の外面に記号を持つことが多い。

小形台付壺（図5－9）　脚台を持ち口縁部が直立する小形の壺である。第Ⅴ様式新段階に新しく出現し、文様を持たない。外面は磨き仕上げ。

台付無頸壺A　口縁端部に二孔一対の紐孔を二組もち、脚台には大きな円孔をうがつ無頸壺である。第Ⅳ様式に限ってみられ、発達した凹線文を描く。

鉢C（図4－15）　口縁端部が屈曲して外に開く無文の鉢である。第Ⅴ様式に新しく出現し、型式変化を遂げながら庄内式、布留式へと続く。大形品には小さな円錐形の脚台を持つものがある。

双把手付台付鉢　深い直口の台付の鉢に一対の把手がつく。第Ⅳ様式にみられ、大和地方では凹線文を描くが、河内地

方では刺突文を描くものがある。

小形台付鉢（図6－12・13）　丸みを帯びた深い小形の鉢に脚台がつく。第Ⅳ様式から第Ⅴ様式古段階にみられ、第Ⅳ様式のものは凹線文を持つが後に失われる。

小形鉢（図6－16）　粗製の小形鉢である。第Ⅴ様式に現われて庄内式へと続く。底部に焼成前の穿孔を持つものが多く、器表は撫であげて仕上げるものと叩き目をそのまま残すものがある。

手あぶり形土器（図3－14）　口縁端部が外接する鉢に半円状のドームがつく器種である。やや張り出した腹部の中位に鍔状の突帯を持つ。第Ⅴ様式の新段階に現われて、庄内式、布留式へと続く。

高杯A（図6－1～6）　口縁部がゆるやかに立ち上がる全面磨き仕上げの高杯である。第Ⅰ様式から第Ⅴ様式を通じてみられ、土師器へと受け継がれる器種であるが、そのあいだの形態の変化には著しいものがある。また、第Ⅰ様式では稀な器種であったが、第Ⅱ様式から第Ⅳ様式の間に発達し、第Ⅴ様式では最も主要な器種となる。第Ⅱ様式には櫛描文を描くものが存在するが、大和地方では第Ⅲ様式になると無文化する。河内地方では第Ⅲ様式の段階に刺突文を持つものがある。杯部の変化をみると、第Ⅰ様式では杯部と口縁部の区別にはっきりしないものだったのが、第Ⅱ様式から第Ⅲ様式にかけて杯部が大きく発達し、さらに第Ⅳ様式には杯部と口縁部が稜をなして明確に分かれ、口縁部の上端と下端に数条の凹線文が描かれるようになるが、第Ⅴ様式になると凹線文の退化によって再び無文となり、口縁部は次第に外反度を強めてゆく。脚部の変化をみると、第Ⅰ様式では丈の低い中実のつくりであったものが、第Ⅱ様式にはやや高いものとなり、第Ⅲ・第Ⅳ様式には円盤充塡法の採用によって柱状部が著しく伸長する。第Ⅴ様式には柱状部と裾部の区別が失われて、脚部は杯部下端から斜めにまっすぐ延びて接地するものとなる。なお、第Ⅴ様式中段階までは円盤充塡法は引き続いてみられる。

高杯B（図6－7～10）　皿状の杯部から口縁部が鍔状に水平に延び出す高杯である。第Ⅰ様式から第Ⅳ様式にみられる。

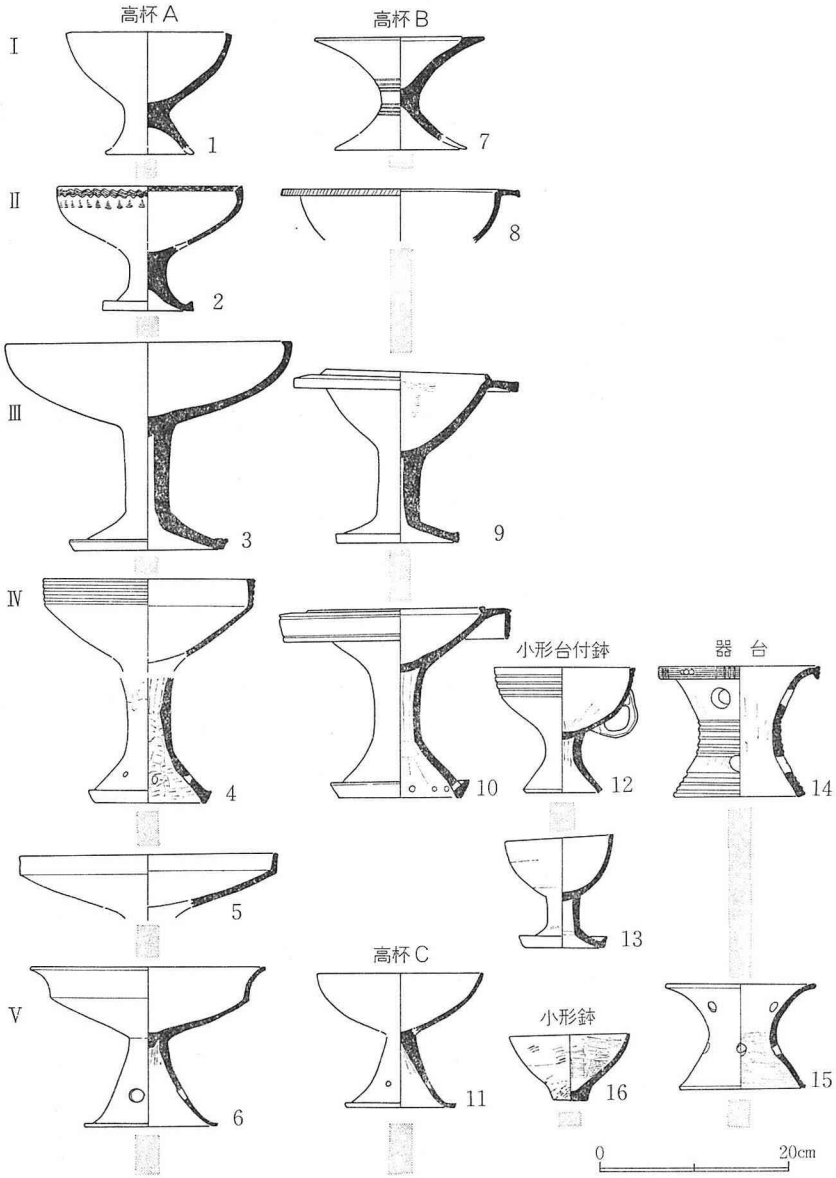


図6　各器種の変化(5)
1〜5・7・8・12唐古・鍵　6・11・14〜16四分　10・12清水風

杯部の変化は、第Ⅰ様式では口縁部上面を広く拡張するだけであったものが、第Ⅱ様式になると、口縁部が鍔状に延び出すようになり、第Ⅰ様式にみられた口縁部の内面への拡張は突帯へと変化する。第Ⅲ様式には口縁端部がさらに下方へ垂下するものが現われて、第Ⅳ様式には垂下する口縁端部に数条の凹線文が描かれるようになる。脚部の変化は高杯Aとほぼ同様の変化を示す。

高杯C（図6－11）　Ⅲを少し深くしたような部をもつ高杯である。第Ⅴ様式に出現し、庄内式へと続く。

器台（図6－14・15）　上下端が外方に開く中空の筒状品である。器体には円孔をうがつものが多い。第Ⅳ様式から第Ⅴ様式にみられる。第Ⅳ様式には口縁端部や器体に凹線文を描くが、第Ⅴ様式には退化して無文となる。

甕（図7）　砲弾形の器体から口縁部が外反して開く煮沸用の器である。第Ⅰ様式から第Ⅴ様式を通じてみられる基本的な器種であるが、細かくみると各様式にみられる甕の間には一系列の変化としては理解し難い場合があり、複数の系列の甕が消長しながら順を追って推移したものと考えるのが妥当である。また、第Ⅱ様式から第Ⅲ様式にかけては河内地方と大和地方およびその他地方の間には系列の異なる甕が明瞭な地域性を発現しながら存在している。[18] 以下、順を追って概観する。

甕A（1）　如意状の口縁部を持ち、口縁端部には刻み目を持つものが多い。第Ⅰ様式の段階に遠賀川式土器が分布する西日本の広域に流布したものであるが、第Ⅰ様式でも新しい段階になると、型式学的な変化を遂げて、畿内地方の独自性を示すようになる。口縁部下側に描かれる箆描沈線文は途中までは多条化してゆく過程が辿れるが、第Ⅰ様式新段階の後半には文様が失われるものが多くなる。

甕B（2・3）　体部外面に縦方向の、口縁部内面に横方向の荒い刷毛目をかけるいわゆる大和型の甕であり、口縁端部には刻み目を持つ。第Ⅱ様式から第Ⅲ様式に、大和から山城をへて摂津へ至る地域でみられるものである。第Ⅱ様式から第Ⅲ様式の間に口縁部の形態と製作技法に変化がある。

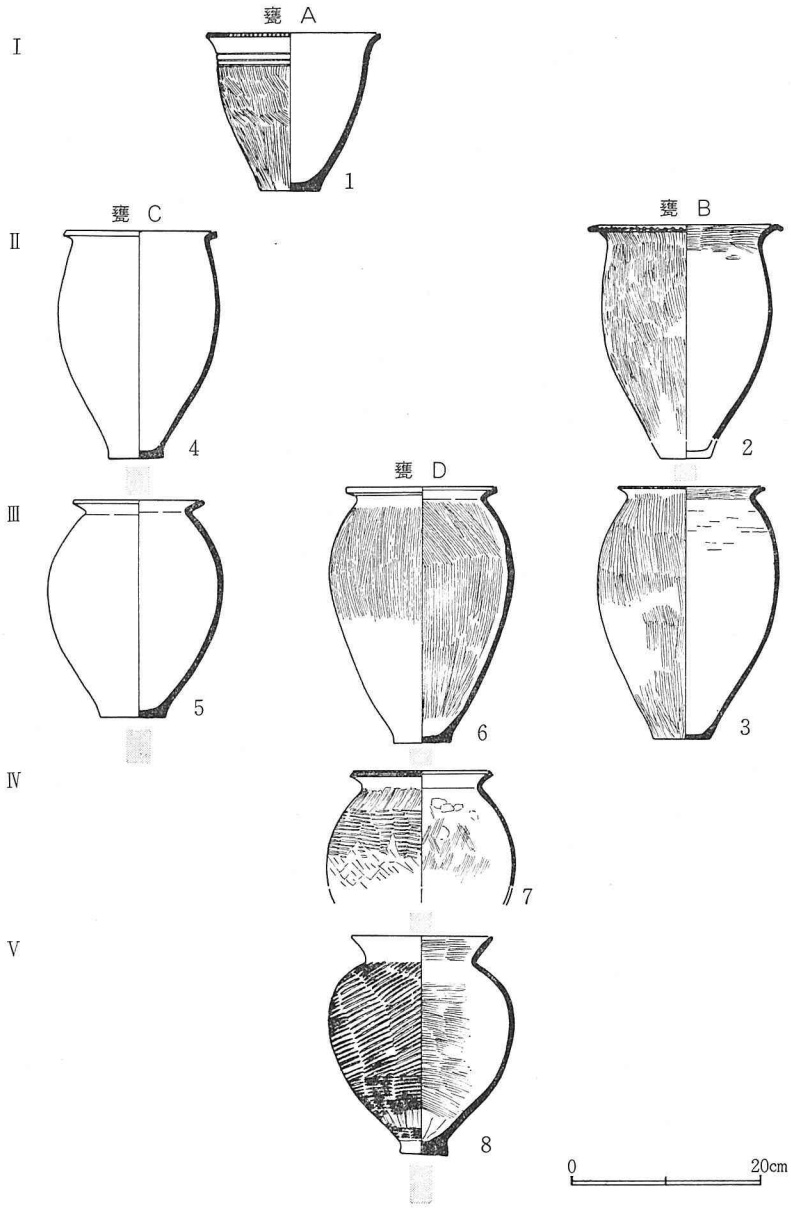


図7　各器種の変化(6)
1～3・5唐古・鍵　4・6四分　7山賀　8亀井

甕C（4・5）　外面を縦方向に磨きあげて仕上げるいわゆる河内型の甕であり、第Ⅱ様式から第Ⅴ様式古段階の河内地方・和泉地方にみられる。体部の形態が砲弾形のものから倒卵形の大きく腹部の張り出す形態へと変化する。

甕D（6～8）　口縁部が鋭く外反し、体部を叩きあるいは刷毛目によって仕上げる甕である。第Ⅲ様式から第Ⅴ様式にかけて発達し、第Ⅴ様式の甕へと連なってゆく。第Ⅲ様式から第Ⅳ様式にかけては畿内から中部瀬戸内に至る広い地域で共通してみられる。[19] 第Ⅲ様式には口縁端部はわずかな面を持つだけであったが、第Ⅳ様式になると、大きく拡張されて数条の凹線文を描くものが現れる。また、第Ⅲ様式には体部は叩き目が残るものもあるが刷毛目をかけて丁寧に仕上げていたものが、第Ⅳ様式にはそのまま叩き目を残すものが主流となる。そして第Ⅴ様式には専ら叩きによる仕上げとなり、つくりが著しく粗雑化してゆくということは都出比呂志氏が説くとおりである。[20]

① 佐原眞氏は、この篦描沈線文の変化を軸に第Ⅰ様式を古・中・新の3段階に細別する。佐原眞「山城における弥生式文化の成立―畿内第Ⅰ様式の細別と雲の宮遺跡出土土器の占める位置―」（『史林』第五〇巻第五号、一九六七年）。

② 櫛原体が中空の細管を連ねたものであることは列点文の表現（図1－2）からわかる。また第Ⅳ様式の段階には割り板の断面を利用して描いた板描旋状文（図1－5）がある。

③ 佐原眞氏の表現をかりるならば、前者は「手で描く」波状文、後者は「土器が描く」波状文である。小林行雄・佐原眞『紫雲出』香川県三豊郡詫間町紫雲出山弥生式遺跡の研究、一九六四年。

④ 前掲注③文献。

⑤ 数条をまとめて描くいわゆる擬凹線も認められる。前掲注③文献。

⑥ 佐原眞「弥生式土器製作技術に関する二、三の考察―櫛描文と回転台をめぐって―」（『私たちの考古学』二〇号、一九五九年）。

⑦ 佐原眞氏が正しく指摘するとおり、発達した櫛描文についてみると、櫛原体の見かけ上の動きは、直線文、波状文、簾状文については右回り、列点文については左回りであって、回転台の回転の方向が自在であったことがわかる。第Ⅲ様式の流水文は、土器の回転の方向を小刻みに変えながら描いたものである。前掲注③文献。

⑧ 第Ⅱ様式の櫛描文は佐原眞氏の言う畿内型櫛描文の初期のもの、第Ⅲ・第Ⅳ様式の櫛描文は真正の畿内型櫛描文と捉えられる。

⑨ 佐原眞氏は、ここで言う回転撫でをヨコナデと呼称しているが、仕上げの段階に器表を横方向に撫でる調整は、たとえば土器の回転技術が存在していなかった縄文土器にも認められ、それとは区別が必要である。前掲注③文献。

⑩ 小林行雄「弥生式土器の様式構造」（『考古学評論』第一巻第二号日本先史土器論、一九三五年）。なお、本稿では、小林氏の「形式」にあたる概念を佐原眞氏にならって「器種」と呼びかえている。

⑪ 器種の呼称については、次の文献を参考にはしているが、実状に即してかなりの改変を加えている。佐原眞「畿内地方」（小林行雄・杉

原荘介編『弥生式土器集成』本編二、一九六八年）。

⑫ 田原本町教育委員会「唐古・鍵遺跡第二二・二四・二五次発掘調査概報」（『田原本町蔵埋文化財調査概要』四、一九八六年）。

⑬ 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ』奈良国立文化財研究所学報第三七冊、一九八〇年。

⑭ 第Ⅱ様式から第Ⅲ様式にかけて頸部が著しく長く延びるものがある。なお、河内地方の広口壺には森井貞雄氏が分析を加えている。森井貞雄「河内地方の畿内Ⅲ・Ⅳ様式編年の一視点」（『大阪文化誌』第一五号、一九八二年）。

⑮ 大和地方の広口壺は第Ⅳ様式から第Ⅴ様式古段階への推移が不自然である。つまり、第Ⅳ様式の広口壺の口縁端部は上下方の両方へ大きく拡張するものであるのに対して、第Ⅴ様式古段階のそれは下方へのみ拡張されたものとなっている。また、第Ⅳ様式の広口壺は器種構成に占める割合の低いものであるのに対して、第Ⅴ様式古段階になると一躍主要器種に変化するということも不自然である。口縁端部を下方にのみ拡張するという特徴は、河内地方では第Ⅲ・第Ⅳ様式以来みられるものであり、口縁端部に関する限り、広口壺が自然な推移をみせるのは河内地方であるといえる。また、大和地方の第Ⅴ様式古段階の広口壺は、形態の近似する壺Dが第Ⅳ様式において著しく盛行する器種であったことを考慮するならば、壺Dからの型式変化としてあるいは考えられるかもしれない。

⑯ 文殊省三「大和河床出土の貨泉・鉢・台付無頸壺・蓋について―瓜破遺跡出土資料の紹介（一）―」（『大阪市立博物館研究紀要』第一八冊、一九八六年）。

⑰ 第Ⅱ様式にみられる無文の広口壺を先駆的な形態として考えることも可能ではある。

⑱ 松本洋明「弥生土器の考察―弥生時代中期の大和型の甕を中心として―」（『末永先生米寿記念獻呈論文集』、一九八六年）。

⑲ 松本洋明氏の言う畿内型甕である。前掲注⑱文献。なお大和地方における大和型甕から汎瀬戸内型甕への移行の状況については藤田三郎氏の分析がある。藤田三郎「土坑 SX101 出土甕の分析―弥生中期における甕の一様相―」（田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡第二〇次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要三、一九八六年）。

⑳ 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係―淀川水系を中心に―」（『考古学研究』第二〇巻第四号、一九七四年）。

第三章　土器様式の推移と画期

櫛描文型器種と非櫛描文型器種は、畿内弥生土器の推移の中でどのように展開し、相互にいかなる関係があるのだろうか。本章では、第Ⅰ様式から第Ⅴ様式の各様式において両者が実際にどのように組合わさるかを、第一章での土器編年の結果を踏まえて通観することによって、本稿の課題である第Ⅲ様式・第Ⅳ様式から第Ⅴ様式への土器の変化の様相を調べ直してみることにしよう（表2）。

第Ⅰ様式　文様からすれば篦描沈線文の段階である。器種構成の状況を典型的に示す資料として、唐古・鍵遺跡第二〇次調査ＳＫ215の中層からまとまって出土した一群の資料[1]を例にとろう。この土器群は約七〇点が紹介されているが、器種の種類は多くなく、広口壺が四一点、鉢が八点、甕が九点に、壺蓋がみられる程度であって、このうち、広口壺には貼付突帯文や彩文を持つものがあるが、文様を持たないものもある。鉢Ａは小形品には篦描沈線文が描かれているが、大形品は文様を持たない。この土器群は、壺の文様構成からすると、佐原眞氏のいう新段階の初頭に位置づけられよう。なお、第Ⅰ様式を構成する器種として類例は少ないが、他に高杯Ａ、高杯Ｂ、無頸壺が存在することが知られていて、これらにも篦描沈線文を描くものと無文のものが認められる。このようにみると、第Ⅰ様式を構成する各器種は、概して篦描沈線文を持っていて、無文のものも存在しはするが、後の器種の分化がまだ明確化していないと捉えられる。ただ、第Ⅰ様式末葉の状況を唐古・鍵遺跡第二〇次調査土坑ＳＫ212の土器群[2]でみると、篦描沈線文が著しく多条化する一方で、篦描沈え文を持つものの比率が低下し、逆に無文のものの比率が増加していることは、器種の分化の始まりを示しているとも考線られる。

第Ⅱ様式　唐古・鍵遺跡第二二次調査井戸ＳＫ1201[3]、四分遺跡溝ＳＤ630[4]の資料がある。篦描沈線文が櫛描文におき変わった段階であり、櫛描文は、扇形文、流水文を含むが、ほとんどが直線文である。器種には、広口壺、直口壺、無形壺Ｂ、鉢Ａ、鉢Ｂ、高杯Ａ、高杯Ｂ、甕Ｂがある。このうち直口壺は第Ⅰ様式にみられなかった器種である。櫛描文をもつ器種は、広口壺、直口壺、無頸壺Ｂ、鉢Ａ、鉢Ｂ、高杯Ａであるが、広口壺、鉢Ａ、高杯Ａには第Ⅰ様式と同様に文様を持たないものがある。甕はまったく文様を失い、高杯Ｂも類例は少ないが文様を持たないようである。このように、第Ⅱ様式は、櫛描文型器種と非櫛描文型器種の分化が現われ始めていることがうかがえる。

第Ⅲ様式　第Ⅲ様式古段階は、発達した櫛描文が単純にみられるが、この段階の櫛描文は、回転台を用いてさまざまな文様を巧みに描き分けており、直線文、波状文、流水文、簾状文、列点文などの種類がみられる。櫛描文型の器種として

表2　器種構成の変遷と文様の推移（大和地方）

		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ(古)	Ⅳ	Ⅴ古	Ⅴ中	Ⅴ新
	広口壺	1,0	2,0	2,3	3,3/4,4	4',0	0	0
櫛描文型器種	直口壺		2	2,3				
	細頸壺A			3	3/4			
	水差形土器			3	3,3/4,4	0		
	無頸壺B	1	2	3	3/4,0	0		
	台付無頸壺C				3	3		
	鉢A	1	2	3	3,4			
	鉢B・台付鉢B	1,0	2,0	2,3	3/4,4	0		
非櫛描文型器種	壺D			0	4,0			
	二重口縁壺							0
	細頸壺B						0	0
	壺F			4	4			
	短頸壺			4	4	0	0	0
	長頸壺					0	0	0
	小形台付壺							0
	台付無頸壺A			4	4			
	鉢C						0	0
	双把手付台付鉢			4	4			
	小形台付鉢			4	4	0		
	小形鉢					0	0	0
	手あぶり形土器							0
	高杯A	1,0	2	4,0	4,0	4',0	0	0
	高杯B	1	0	4,0	4,0			
	高杯C					0	0	0
	器台			4	4	4',0	0	0
	甕A	1,0						
	甕B		0					
	甕D			4	4	4',0	0	0

1. 篦描沈線文　2. 櫛描直線文　3. 各種櫛描文　3/4. 櫛描文＋凹線文　4. 凹線文
4'. 擬凹線，退化凹線　0. 無文

は、広口壺、直口壺、細口壺A、水差形土器、無頸壺B、鉢A、台付鉢Bがあり、非櫛描文型の無文の器種としては、壺D、壺F、高杯A、高杯B、甕B、甕Dが認められる。このうち細口壺A、水差形土器、壺D、壺Fは、第Ⅱ様式にはみられなかった器種である。この段階では、発達した櫛描文を描く器種が盛行する一方で、壺Dや壺Fの出現によって非櫛描文型の器種が一定の割合を占めるようになり、櫛描文型器種と非櫛描文型器種の分化が明確になっているといえる。なお、凹線文が出現する第Ⅲ様式新段階の状況をみると、簾状文の頻度が増し、一部の器種に凹線文が描かれ始めるなどの変化はあるが、器種構成の状況には基本的な変化はみられない。

第Ⅳ様式　凹線文が著しく発達する段階であるが、凹線文が単純にみられる例はなく、櫛描文と混在するのが一般的なあり方である。大和地方では、櫛描文は、直線文の比率が減る一方で、簾状文の頻度が増し、櫛原体の代わりに割板の断面を用いて条線を描く板描櫛描文が存在している。含まれる器種には櫛描文型の器種としては広口壺、細口壺A、水差形土器、無頸壺B、台付無頸壺C、鉢A、鉢B・台付鉢B、非櫛描文型の器種としては壺D、壺F、短頸壺、台付無頸壺A、双把手付台付鉢、小形台付鉢、高杯A、高杯B、器台、甕Dがある。これらのうち、台付無頸壺C、短頸壺、台付無頸壺A、双把手付台付鉢、小形台付鉢、器台は第Ⅲ様式にはみられなかった器種であって、この段階に非常に多くの新器種が出現していることがわかる。櫛描文型器種と非櫛描文型器種が明確に分かれていることは前様式と同様であるが、ただ、器台、短頸壺などの新型器種の出現によって非櫛描文型の器種が大きく発達する一方で、櫛描文型の器種が器種構成全体に占める比率を低下させることによって、全体として土器の無文化が進行することになるのである。前様式までは専ら櫛描文を描いていた櫛描文型の諸器種は、この段階では、櫛描文と同時に凹線文を描くことが一般的となり、水差形土器や鉢Aのように櫛描文をまったく失ってしまうものも現われる。凹線文は双方の諸器種を貫いてみられる技術的性格の濃厚な文様であって、櫛描文型器種に描かれる櫛描文を決して駆逐しているわけではない。

一方、河内地方の一部では、櫛描文とりわけ簾状文が第Ⅳ様式の段階にむしろ異常な発達ぶりを示している。つまり、

櫛描文型器種と非櫛描文型器種が組み合って様式を構成していることは大和地方と同様であるが、大和地方とは異なって櫛描文型の諸器種が凹線文を受けつけず、逆に簾状文を繁辱化させているのである。非櫛描文型の諸器種は大和地方と同様に発達した凹線文を描いているものが多い。なお、大和地方の第Ⅳ様式に通有の短頸壺は、この段階では発達していない。

第Ⅴ様式　土器の器表からついに文様が失われる段階である。古・中・新の三段階に分かれるが、各段階は器種構成において変化がみられ、実質的には、たとえば第Ⅱ様式と第Ⅲ様式の変化、第Ⅲ様式と第Ⅳ様式の変化に対応し得るだけの内容を持っている。

古段階を構成する器種には、櫛描文型器種として広口壺、無頸壺B、鉢Bが、非櫛描文型器種として短頸壺、長頸壺、小形台付鉢、小形鉢、高杯A、高杯C、器台、甕Dがあるが、前様式までとは異なり、櫛描文型の諸器種は櫛描文をほとんど描かなくなり、凹線文もまた同時に失われている。前様式までにみられた細口壺A、水差形土器、壺D、壺F、台付無頸壺A、双把手付台付鉢、高杯Bが姿を消し、長頸壺、小形鉢が新しく出現する。中段階になると、さらに無頸壺B、鉢Bが姿を消し、細口壺B、鉢Cが登場し、新段階には、二重口縁壺、小形台付壺、手あぶり形土器が新しく加わっている。

第Ⅳ様式までに盛行していた櫛描文型の器種が残存してみられるのは、広口壺を別とすれば、第Ⅴ様式の古段階までであって、中段階にはかつての櫛描文型の諸器種は完全に駆逐され、非櫛描文型器種のみで様式が構成されるようになっている。なお、この非櫛描文型器種には次の庄内式、さらには布留式へとつながってゆく器種が多い。

これまで、第Ⅴ様式の土器は、器種の再編、土器の無文化、粗雑化など、前様式までの土器との変化の大きさが個別に強調されてきた。もちろん、これらの現象はすべて、相互に関連しながら進行した不可分の現象として一体的に捉えなければならないが、以上のようにみるならば、なかでも、とりわけ器種が大きく交替することにこそ重要な意義があると考

えられる。つまり、土器が無文化することにしても、土器が単に文様を描かなくなったというのではなく、より本質的には、第Ⅳ様式の急速に進行した本来櫛描文を必要としない新しい非櫛描文形の器種の成長によって、旧来の櫛描文形の器種が存在の意義を失って衰退した結果、土器様式全体としての無文化が達成されると理解されるのである。また、土器のつくりが粗雑化してゆくことも、本来櫛描文施文のために考案された回転台が、櫛描文と運命をともにして土器製作の場から失われていったために、回転を用いた丁寧な調整が省かれるようになった結果であって、むしろ副次的な現象と考えられるのである。

① 田原本町教育委員会「唐古・鍵遺跡第二〇次発掘調査概報」(『田原本町埋蔵文化財調査概報』三、一九八六年)。

② 前掲注①文献。

③ 田原本町教育委員会「唐古・鍵遺跡第二二・二四・二五次発掘調査概報」(『田原本町埋蔵文化財調査概報』四、一九八六年)。

④ 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ』奈良国立文化財研究所学報第三七冊、一九八〇年。

第四章　土器様式の変革と背景

これまでの検討の結果、畿内地方の弥生土器における中期から後期への変化、第Ⅲ様式・第Ⅳ様式から第Ⅴ様式への土器の変化がより本質的には器種の大きな交替、つまり在来の櫛描文型の諸器種と新型の非櫛描文型の諸器種の交替が漸進的に進行する過程として理解されることが示された。いま畿内地方の弥生土器から土師器への推移全体を通してみるならば、第Ⅰ様式から第Ⅲ様式・第Ⅳ様式への土器の推移が、文様面においても、器種構成の面においても内的な自然な発展として理解でき、また第Ⅴ様式の土器が次の庄内式・布留式の土器と連続的に捉えられるのに対して、この第Ⅲ様式・第Ⅳ様式から第Ⅴ様式への土器の推移は、土器様式の非常に大きな転換として理解しなければならないであろう。

さて、「土器の研究において、その様式の追求、あるいは結果としてそれぞれの様式の成立とその変遷を導いたもの――様式変化の背景の追求ほど重要なものはない」とは、西弘海氏の言である。[1] ここで前後の時代に目を転じるならば、本稿

で明らかにした第Ⅲ様式・第Ⅳ様式から第Ⅴ様式への土器の変革に匹敵する土器様式の大きな転換現象の例としては、縄文土器から弥生土器への変化、五世紀代における須恵器の導入による新しい土器様式の成立、西氏の言う七世紀初頭における金属器を指向する土器様式への転換などがあげうるが、これらの現象の背後には西氏も説くとおり、いずれも重要な歴史事象が潜んでいる。それでは、この第Ⅲ様式・第Ⅳ様式から第Ⅴ様式への土器様式への転換の背景には、いったいどのような歴史事象が存在するのであろうか。

土器が大きな変化を示す第Ⅳ様式から第Ⅴ様式にかけての畿内弥生社会がやはり大きな変革期にあったということは、主要な利器が石製品から鉄製品へと移行して完全な鉄器時代にはいるなどの事実によって古くから認識されてきたことである。[2] また集団関係も変化を示し、たとえば中南河内の生駒山西麓部、奈良盆地南部[3]、摂津東部[4]などに典型的にみられるように、核となる大規模な環濠集落が点的に散在していた状況から、[5] 小規模な集落が拡散して数を増し、同時に多数の高地性集落が成立する。[6] 竪穴住居の平面形が円形から方形へと変化するのもこの頃である。さらに墓制においても変化がみられ、第Ⅲ様式の段階には瓜生堂・加美遺跡に代表されるような複数の主体部を持つ家族墓的な性格の方形低墳丘墓が集落の近辺に発達していたが、第Ⅴ様式古段階の巨摩廃寺遺跡の例を境に、以後は顕著な例がみられなくなり、庄内式以降の段階になると、集落近くに群をなして営まれる低墳丘墓は単葬あるいは中心埋葬が特別に卓越するものばかりで構成されるようになっている。そして隔絶した規模を持つ前方後円墳がやがて築かれるようになるのである。

ちなみに最近の研究によれば、畿内地方に、貨泉、漢鏡など中国系の文物の直接的な流入が顕著化するのが第Ⅴ様式の古段階であることが指摘され、これらの諸文物の年代観を手がかりに、従来紀元二〇〇年頃と推定されていた第Ⅴ様式の始まりの年代が、大きくさかのぼって、紀元一〇〇年を前後する頃であると推定されるようにもなっている。[7]

翻って、再び土器をみると、この第Ⅳ様式から第Ⅴ様式を特徴づけているのが、畿内南部を中心に分布する絵画と記号である。詳細は別稿に委ねたいが、筆者が検討した結果によると、第Ⅳ様式の絵画は比較的表現の具象性が高く、断片が

多いものの、壺Fや短頸壺の肩部に、鹿、建物、人物、舟、魚、鳥などの画題が組み合って情景を構成していることのわかる例が次第に増加しつつある。一方、第Ⅴ様式の絵画は、龍の図像を別とすれば、[8]表現の抽象化が著しく、記号と同様、長頸壺あるいは広口壺の肩部にシンボルのように描かれているものが多い。第Ⅳ様式の具象的な場面を構成する絵画が、金関恕氏の説くように、[9]日常の風景というよりは、農耕神・祖霊神をまつる祭場あるいは祭儀の場面を表わしたものであると考えてよいとするならば、第Ⅳ様式の絵画が祭場・祭儀の場面を表現することによって弥生人の観念世界を示していたのに対して、第Ⅴ様式の絵画と記号はそれをさらに抽象的に示すようになっているとも考えられるであろう。

注目されるのは、これら第Ⅳ様式から第Ⅴ様式への土器の絵画のあり方の変化が銅鐸の絵画のそれと基本的に共通するということである。銅鐸は、突線鈕一式の段階を境に著しい大形化を遂げ、「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」へと変質するが、[10]四〇数例の銅鐸絵画のうち大半が外縁付鈕式、扁平鈕式の「聞く銅鐸」に属していて、これらには第Ⅳ様式の土器の絵画と同じように、複数の画題が組み合って情景を構成している例がしばしば見られるのに対して、突線鈕2式以降の絵画銅鐸は六例と著しく数が減少するとともに、静岡県悪ケ谷鐸[11]、敷地鐸[12]のように、表現が抽象的な動物を単独で描くようになるのである。最古の銅鐸がどこまでさかのぼりうるかは難しい問題であるが、通説のように扁平鈕式の段階が第Ⅳ様式に並行するとするならば、銅鐸の変質と土器様式の変革の過程、銅鐸絵画と土器の絵画の変化の過程は軌を一にすることになる。

第Ⅳ様式から第Ⅴ様式にかけて畿内の弥生土器が非常に大きな変化を遂げ、その変化が器種構成の転換、つまり櫛描文型の諸器種が衰えて、第Ⅳ様式に著しく発達する非櫛描文型の諸器種と交替する結果として捉えられるということは既に示したとおりである。最後に改めて、新しく台頭する非櫛描文型の諸器種の内容を吟味すると、短頸壺、長頸壺、小形鉢、鉢C、高杯A、器台と、頸が直立する液体用の壺と供献用の捧げる器が多く祭儀的な性格を思わせることが特徴であり、また次の庄内式さらには布留式へとつながってゆくものも多い。そして、大変興味深いことに、絵画や記号が描かれる器

種は、壺F、短頸壺、長頸壺、広口壺と、変化のあり方に若干の検討の余地を残す広口壺を別とすれば[13]、実はいずれもこの非櫛描文型の器種に属している。櫛描文および櫛描文を描く器種が弥生中期を特徴づける独自な習俗・儀礼と結びついたものと考えてよいとするならば、それらが右のような新しい意義を担う櫛描文を描かない器種に置き換えられるということは、背後の社会の変化などをも考え合わせると、同時にそれらが結びついた習俗や儀礼が新しいものへと置き替わったことを示すとも考えられる。

この意味で、第Ⅲ様式・第Ⅳ様式から第Ⅴ様式にかけてみられる土器の新旧の器種の交替は、やはり縄文土器から弥生土器への変化、須恵器の導入などにも比肩する土器様式の一大変革として理解しなければならないのであって、その背景には、弥生中期から後期にかけての激しい社会の変化のうねりの中で、畿内の倭人社会が、旧習を捨てて、次の古墳時代へとつながってゆく新しい習俗ひいては祭儀形態を強力に発達させていった事情が存在していたと考えられるのである。

① 西弘海「土器様式の成立とその背景」（『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集、一九八二年、四四七頁）。

② 小林行雄「弥生式文化」（『日本文化史体系』第一巻　原始文化、一九三八年）。

③ 寺沢薫「大和弥生社会の展開とその特質」（『橿原考古学研究所論集』四、一九七九年）。

④ 原口正三「大阪府安満遺跡と周辺の遺跡」（金関恕・佐原眞編『弥生文化の研究』第七巻　弥生集落、一九八六年）。ただし、原口正三氏は、安満遺跡を母集落とする天神山遺跡、芝谷遺跡、古曽部遺跡の拡散と発展の時期を第Ⅳ様式とみるが、本稿で示した土器の編年観からすれば、第Ⅴ様式古段階と捉えるべきである。

⑤ 酒井龍一「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」（『奈良大学文化財学報』第三集、一九八四年）。

⑥ 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係―淀川水系を中心に―」（『考古学研究』第二〇巻第四号、一九七四年）。豊岡卓之「畿内第Ⅴ様式暦年代の試み」（『古代学研究』第一〇八・一〇九号、一九八五年）。ただし、核となる環濠集落もひきつづいて発展がみられ、庄内式、あるいはその直前の時期まで同様に存続する。都出比呂志「環濠集落の成立と解体」（『考古学研究』第三一巻第三号、一九八三年）。

⑦ 寺沢薫「弥生時代舶載製品の東方流入」（『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズⅡ、一九八五年）。森岡秀人「弥生時代暦年代をめぐる近畿第Ⅴ様式の時間幅」（『信濃』第三七巻第四号、一九八五年）。前掲注⑥豊岡文献。かつて佐原眞氏は、石鏃が大形化して高地性集落が発達する第Ⅳ様式末を「倭国大乱」の時期にあてて、紀元一八〇年前後と推定し、第Ⅴ様式を「卑弥呼の時代から古墳の成立におよぶ約一〇〇年間」つまり紀元三世紀とみる説を示しているが、現

在では意見を改められている由である。田辺昭三・佐原眞「弥生文化の発展と地域性　近畿」（和島誠一編『日本の考古学』Ⅲ　弥生時代、一九六六年）。

⑧ 竜の図像が第Ⅴ様式に新しく現われることについては、弥生人の意識の中にもともとあったものをこの時期になって視覚的に表わすようになったと考えることも可能ではあるが、中国製の諸文物が近畿地方に直接流入してきたことを示す事例が顕著化するのが上述のように第Ⅴ様式古段階であることを考慮するならば、この段階に、竜の観念そのものが大陸から新しく導入された可能性の方が蓋然性が高い。

⑨ 金関恕「呪術と祭り」（『岩波講座日本考古学』第四巻　集落と祭祀、一九八六年）。

⑩ 田中琢「『まつり』から『まつりごと』へ」（坪井清足・岸俊男編『古代の日本』第五巻　近畿、一九七〇年）。

⑪ 梅原末治『銅鐸の研究』、一九二七年。

⑫ 前掲注⑪文献。

⑬ 第二章注⑬参照。

挿図出典

末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第一六冊、一九四三年。
図2-5・10、図3-1・2・6、図4-2・6・9・11、図5-3・5・8～10、図6-1・2・7・8、図7-1。

田原本町教育委員会「唐古・鍵遺跡第一六・一八・一九次発掘調査概報」（『田原本町埋蔵文化財調査概要』二、一九八二年）。
図2-1、図3-3・11、図4-13、図5-6・7、図6-3・4・13、図7-7。

田原本町教育委員会「唐古・鍵遺跡第二二・二四・二五次発掘調査概報」（『田原本町埋蔵文化財調査概要』四、一九八六年）。
図2-3・6、図3-4・7・8、図4-5・12、図5-2・4、図7-2・3。

田原本町教育委員会「唐古・鍵遺跡第二七・二八次発掘調査概報」（『田原本町埋蔵文化財調査概要』八、一九八七年）。
図2-2。

田原本町教育委員会『多遺跡発掘調査報告―第七・八次調査―』田原本町文化財調査報告書第一集、一九八五年。
図4-1・10。

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ』奈良国立文化財研究所学報第三七冊、一九八〇年。
図2-4・7、図3-5・12、図4-3・7・8・11・14・15、図5-6・11・12・15・16、図7-6・8。

奈良県立橿原考古学研究所「天理市清水風遺跡」（『奈良県遺跡発掘調査概報一九八六年度』、一九八七年）。
図3-10、図6-10・14。

大阪文化財センター『亀井』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書、一九八三年。
図2-8、図6-9、図7-5。

大阪文化財センター『山賀（その三）』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書、一九八四年。

図7－4。

山本雅靖「河内国府遺跡出土の弥生式土器――一土坑出土の弥生式土器群の紹介とその製作技術について――」（『大阪文化誌』第三号、一九八二年）。

図2－9。

〔謝辞〕小稿は一九八七年度に京都大学に提出した修士論文の一部を書き改めたものである。小稿を作成する過程においては小野山節先生から数々の御指導を頂き、佐原眞先生には原稿を校閲して頂いた。原稿および図面の作成に当っては岡村秀典氏の御指導を受けた。菱田哲郎氏を始めとする京都大学考古学研究室の諸学兄、および藤田三郎氏、豆谷和之氏を始めとする唐古弥生文化研究会（田原本）の諸氏からは、日ごろより多々の御助言、御援助を頂いている。資料の観察に際しては、石神幸子、井藤暁子、岡内三眞、置田雅昭、斉藤明彦、木下正史、木下亘、田中清美、寺沢薫、深沢芳樹の各氏のお世話になり、有益な御教示を頂いた。末筆ながら記して感謝の意を表します。

（京都大学大学院生　　）

Transition and Evolution of Kinai 畿内 Yayoi Pottery

KUWABARA Hisao

Yayoi pottery of the Kinai district is thought to have undergone a great change between the middle phase and the late phase. In this paper, I first examine the change in pottery surface patterning and the relation of pottery types to these patterns, dividing the various types largely into two groups: comb patterned and non-comb patterned. I then examine, chronologically, how these two pottery types developed. I conclude that the change between the middle and late phases can be understood as being the result of a gradual shift from comb patterned to non-comb patterned types. I believe that this great evolution in pottery styles reflects the changing social conditions, customs and religious forms which occurred towards the beginning of the *Kofun* 古墳 era.

Nam Sách Power in the Early Years of the Lê Dynasty in Vietnam

YAO Takao

After Vietnam achieved independence during the tenth century, there was a factional power in the Nam Sách 南策(冊) located on the eastern border of the Hồng Hà 紅河 delta. The Nam Sách depended, economically, on the transportation between the port of Vân Đồn 雲屯 and the capital, and on the agricultural land brought under cultivation during the Trần 陳 period.

The Nam Sách resisted the policies of the Hồ 胡 dynasty which had usrped the Trần throne and cooperated with the invading Ming forces. As the Ming forces came to exploit salt and various rare goods, the Nam Sách repeatedly resisted the Ming presence in Vietnam. However, because the Nam Sách had not supported Lê Lợi 黎利 in the struggle for independence, there were many difficulties in its attempt to participate in the Lê political power. Militarily, important posts were held by the